

## &lt; 論文 &gt;

## 古典期マヤ支配層の手工業生産と日常生活 —グアテマラ共和国アグアテカ遺跡出土の石器分析を通じて—

青山和夫  
(茨城大学人文学部)

## 【要旨】

本論の目的は、中米グアテマラ共和国アグアテカ遺跡出土の古典期後期末（800年頃）の10,788点の石器の分析を通じ、とりわけ高倍率の金属顕微鏡による使用痕分析を取り入れて古典期マヤ支配層の手工業生産の性格を実証的に検証し、その他の日常生活の諸活動の一部を復元することである。分析の結果、マヤ支配層の間で半専門の手工業生産が広く行われていたことが明らかになった。アグアテカの都市性に関しては、実用品と奢侈品の半専門の手工業生産と消費の中心地であった。従来示唆されていたよりも多くの割合の古典期マヤ支配層が手工業生産に従事していた可能性が高い。石器のデータは、古典期マヤ支配層書記兼工芸家が複数の社会的役割を担っていたとする猪俣 [Inomata 2001b] の仮説を強化する。古典期マヤ社会ではその他の世界の多くの先産業社会のように専門工人は存在せず、職業の専門化が比較的未発達な社会であったのである。

## 【キーワード】

手工業生産、日常生活、都市性、古典期マヤ、アグアテカ  
craft production, domestic activities, urbanism, Classic Maya, Aguateca

## 【目次】

1. 問題の所在及び本論の目的
2. アグアテカ考古学プロジェクト
3. 石器資料と分析方法
4. 石材の獲得及び石器の生産・流通
5. 石器の機能
  - 5-1. アグアテカ遺跡出土石器の表面変化と使用石器
  - 5-2. 石器の石材・型式と機能
6. 石器による手工業生産の変異性
  - 6-1. 建造物M8-13
  - 6-2. 「石のみの家」(建造物M8-8)
  - 6-3. 「鏡の家」(建造物M8-4)

## 6-4. 王宮 (建造物M7-22)

## 7. 結論

## 1. 問題の所在及び本論の目的

かつて古典期マヤ文明は「都市なき文明」であったとされた。古典期マヤ文明の大遺跡は人口が希薄な「空白の儀式センター (vacant ceremonial center)」であり、一握りの神秘的で匿名の神官支配層が天文学、芸術、暦の計算や予言・占いに没頭していたと考えられた[Thompson 1954]。近年のマヤ考古学の調査の進展には目覚ましいものがあり、古典期マヤ文明は以前ほど「神秘的で謎の文明」ではなくなってきている[青山・猪俣 1997; Sabloff 1994]。しかしながら、古典期マヤ文明を築き上げた人々の職業の専門化や日常生活の様子については、まだよくわかっていない点が多い。

手工業生産の専門化の研究において注目されるのが、従属生産(attached production)と独立生産(independent production)の区別である。前者は主に支配層への奢侈品や武器の生産を指すのに対して、後者は不特定多数の消費者への実用品の生産を指すとされる[Costin 2001: 298]。この点をより明らかにする上で重要なのが、自らが支配層に属した手工業工人の研究である。たとえば、図像学や民族史料の研究に基づいて、古典期マヤ支配層に属した書記が、工芸品の製作をはじめとする手工業生産に従事した可能性が示唆されてきた[Coe 1977; Coe and Kerr 1997; Fash 2001; Reents-Budet 1994]。しかし、古典期マヤ支配層の手工業生産に関して、発掘調査によって得られた実証的な考古資料は少ない。

従属生産及び独立生産が、専業生産(full-time production)であったかどうか都市性(urbanism)や手工業生産の専門化の研究を進める上で重要である[Costin 2001: 280]。「都市なき文明」説が打破された1960年代以降、一部のマヤ研究者は専門手工業工人をはじめとする多数の非食糧生産者の存在を想定している[Adams 1970; Becker 1973; Haviland 1974]。しかし、そうした証拠の多くは不十分であり、専業か半専業(part-time production)なのか不明である。

総体的に古典期マヤ人の手工業生産に関して、基礎的で実証的な研究が不足している。その理由としてまず第1に古代マヤ文明の都市の清掃維持活動や建造物の増改築、放棄をはじめとする遺跡の形成過程が挙げられる[Moholy-Nagy 1997]。徐々に放棄された都市遺跡では、手工業生産に関連した遺物の出土量が少ない。第2に熱帯地域に属するマヤ低地では木製品、織物その他の腐敗しやすい手工業製品の保存状態が極めて良くない。そのために、専門手工業生産の復元には困難が伴う場合が多い。

一方、古典期マヤ人の主要利器であった石器は、熱帯低地においても土中で腐敗せず保存状態が良好である。従来の多くのマヤ学者が注目した壮麗な大建築、マヤ文字、石造彫刻や彩色土器に比べて、石器の研究は軽視されてきた。さらにマヤ考古学において、石器の機能の詳細な分析はまだ広範には実施されていない。従来の研究は、石器の形態や民族誌例からの主観的な類推、肉眼や低倍率の顕微鏡による石器の使用痕観察に頼ってきた。

しかし最近になってようやく、筆者を含めた数人の研究者が体系的な複製石器の使用実験を行い、Lawrence Keeley[Keeley 1980]が開発した高倍率の金属顕微鏡を用いた観察法で古典期マヤ人が残した黒曜石製石器とチャート製石器の使用痕研究を行なうようになった[Aldenderfer 1991; Aldenderfer

et al. 1989; 青山 1997, Aoyama 1989, 1995, 1999, 2000, 2001a, 2001b; Lewenstein 1987, 1991; Sievert 1992]。高倍率の金属顕微鏡を用いることによって、肉眼では観察できない石器の使用痕を詳細に分析することが可能になる。この分析法を通して石器の機能をより実証的に復元できるだけでなく、石器に残された手工業生産やその他の日常生活の一側面に関する貴重なデータを提供できるのである。

本論の目的は、中米グアテマラ共和国アグアテカ遺跡出土の古典期後期末（西暦 800 年頃）の 10,788 点の石器の分析を通じて、古典期マヤ支配層の手工業生産の性格を実証的に検証し、その他の日常生活の諸活動の一部を復元することである。とりわけ高倍率の金属顕微鏡を用いて石器の使用痕分析を行い、石器の機能面から手工業生産を解明することに重点を置く。アグアテカ遺跡中心部で見つかった、短時間に放棄された住居跡から出土した遺物は、古典期後期末のマヤ支配層の生活の「最後の時」に関する、タイム・マシンの役割を果たしている。アグアテカ遺跡は、豊富な一次堆積遺物の出土量と唯一無二の良好な保存状態ゆえに、「マヤ低地のポンペイ」として名高い。古典期マヤ支配層の手工業生産の性格を実証的に検証し、日常生活の諸活動を復元する上で理想的な共時的考古資料である（図 1）。

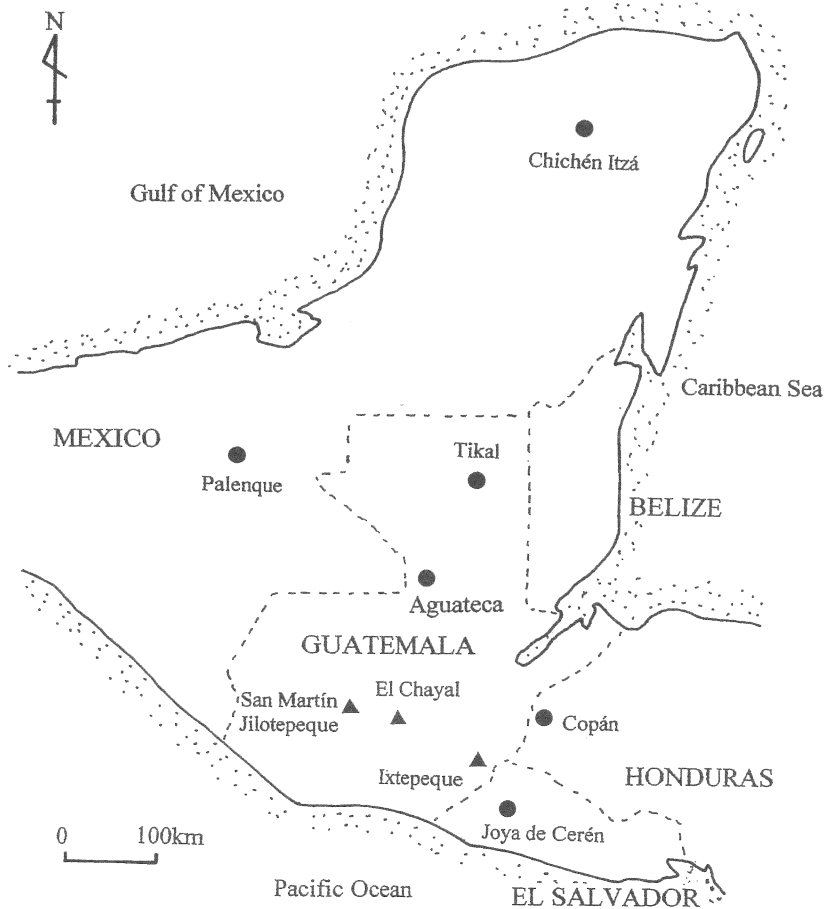


図 1 マヤ地域

本論は、従来マヤ考古学で軽視されてきた石器の研究、とりわけ支配層住居跡の全面発掘調査により出土した石器の詳細な使用痕分析を通じて、これまであまり研究されてこなかった古典期マヤ支配層の手工業生産の性格を実証的に検証するだけでなく、古典期マヤ社会の職業の専門化の研究にも寄与するものである。ちなみに高倍率の金属顕微鏡を用いた大量の石器の使用痕分析をグアテマラ考古学で行ったのは本研究が初めてであり、マヤ考古学で最大の石器の使用痕のデータベースの一つである。

## 2. アグアテカ考古学プロジェクト

米国科学財団 (NSF、研究代表者：猪俣健)、科学研究費補助金、三菱財団 (研究代表者：青山和夫) その他の研究助成を受けたアグアテカ考古学プロジェクトは、古典期マヤ文明のアグアテカ遺跡の発掘調査で出土した遺物の分析を 1996 年から 2003 年まで体系的に行った。その一大目的は古典期マヤ人の日常生活の様子を研究することである。調査団長の猪俣健 (アリゾナ大学人類学部) と共同調査団長の Daniela Triadan (アリゾナ大学人類学部/スミソニアン研究所)、Eric Ponciano (グアテマラ・バジェ大学) 及び青山を中心として、グアテマラ、日本、アメリカ、カナダ、スイス、ドイツ、ポーランドの国際的な調査団員が協力して様々な遺物の分析が進められた。出土遺物は基本的にグアテマラ国外に持ち出せないため、主要な分析はグアテマラ市内で賃借する研究室で行われた。住居跡の全面発掘調査により出土した豊富な一次堆積遺物の多種多様な基礎的かつ実証的な考古学データを互いに検証しながら学際的な研究を行うのが本プロジェクトの大きな特徴である。

アグアテカ遺跡はグアテマラの熱帯低地に属するエル・ペテン県南西部のペテシュバトゥン地域にあり、ペテシュバトゥン川を見下ろす断崖絶壁上に位置する要塞都市であった。これまでの発掘調査によれば、アグアテカはペテシュバトゥン地域の政治センターとして 8 世紀に全盛期を誇った。古典期後期末にかけて同地域では戦争が激化し、アグアテカでは幾重もの長大な防壁が建設された。同遺跡は西暦 800 年頃に敵の急襲にあい、王や貴族が住んだ遺跡中心部が広範囲にわたって焼かれた。パンダービルト大学のペテシュバトゥン考古学プロジェクトに参加した猪俣によるアグアテカ遺跡中心部の焼失住居跡の発掘調査によって、床面直上から実用品だけでなく数々の奢侈品なども含む大量の完形または修復可能な一次堆積遺物が見つかり、支配層はその所持品の大部分を残したまま短時間に住居を放棄したことが明らかになった [Inomata 1997; Inomata and Stiver 1998]。

アグアテカ考古学プロジェクトの発掘調査では、こうした短時間に放棄された建造物跡の調査に焦点が置かれた [Inomata et al. 1998, 2002]。1996 年から 1999 年までの 4 フィールド・シーズンに遺跡中心部の 8 建造物跡 (建造物 M7-22、M7-32、M7-34、M8-2、M8-3、M8-4、M8-8、M8-13) とその周囲が全面発掘され、その他の建造物や発掘区が部分発掘された (図 2)。サクベに面した支配層居住区では、6 つの建造物跡が発掘された。建造物 M7-34、M8-4、M8-8、M8-13 は複数の部屋を有した建造物跡で、建造物 M8-2 と M8-3 は一部屋からなる建造物跡である。王家の人々が居住した宮殿グループでは、建造物 M7-22 と M7-32 が全面発掘された。両方とも複数の部屋を有した建造物跡で、他の支配層住居跡と異なり、古典期マヤ文明に特徴的な持ち送り式の天井を有した。

調査研究の方法論としては、世帯考古学 (Household Archaeology) を用いた [Netting et al. 1984; Santley and Hirth 1993; Wilk and Ashmore 1988; Wilk and Rathje 1982]。これは住居跡やそれに伴う遺物



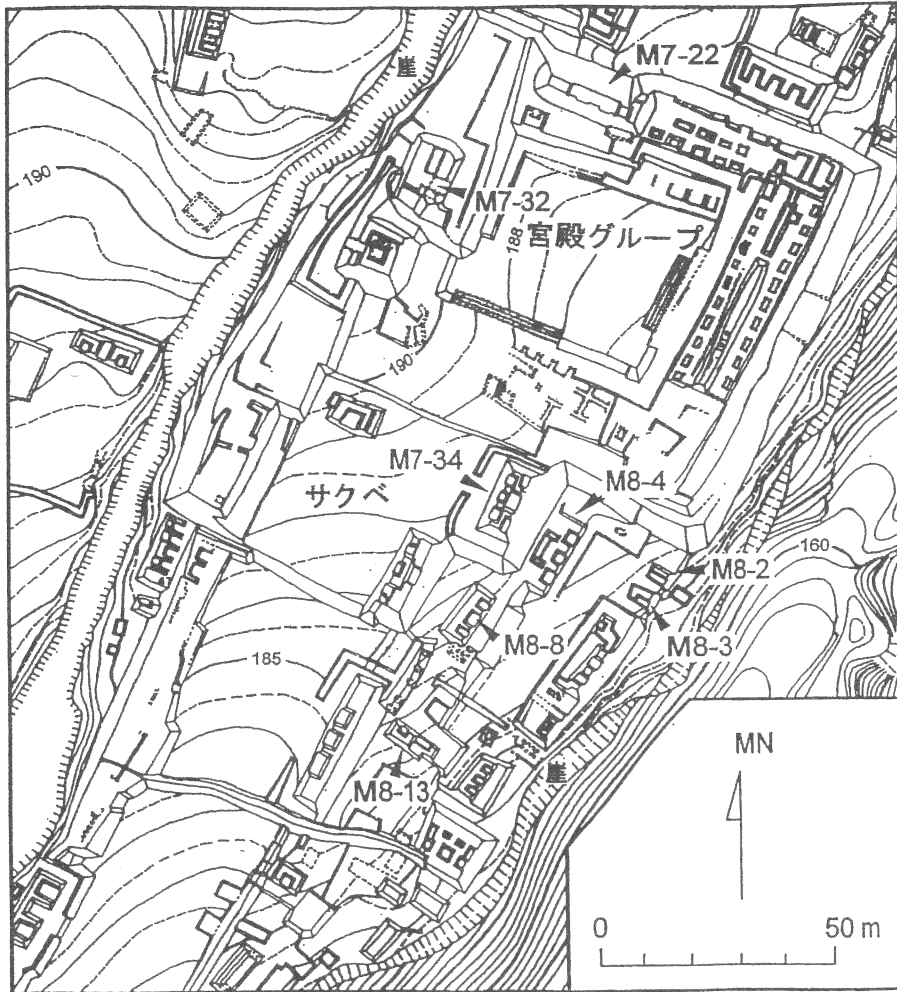


図2 アグアテカ遺跡中心部の全面発掘建造物跡  
(Inomata et al. 2002; Figure 2 をもとに作成)

から、世帯及びその生産、消費、居住などの行動・観念を復元することによって考古学的貢献を目指すものである。当然のことながら考古学では親族関係を直接観察することはできない。しかし、世帯に関する情報を得ることはある程度可能である。ここでは、世帯を住居、食事、その他の基本的な経済活動を共にする集団と定義しておく。いうまでもなく世帯は、ほとんどの人間社会において最も基本的な社会・経済単位である。

建造物の発掘調査では、古典期後期末の最終居住期の一次堆積遺物を収集することに主眼を置き、一部の建造物を除き建造物内部の発掘は基本的に行わなかった。全面発掘された8基の焼失建造物跡から出土した一次堆積遺物は、1基あたり土器50個体から80個体、石器200点から1,700点以上の他に、貝製品、骨製品など多数にのぼるが、全遺物を分析対象とした。一次堆積遺物の多くは、

使用時よりもむしろ保管時の状態を示していると考えられる[Inomata et al. 2002: 323]。しかしその空間分布は、建造物の部屋や中庭等の他の空間の機能の違いを解釈する上で重要な手掛かりを提供する。当時の日常生活を生き生きと伝えるこのような豊富な考古資料はマヤ低地では他に類例がなく、その学術的価値はイタリアのポンペイ遺跡のそれにも匹敵するものである。

こうした焼失建造物跡から出土した遺物の詳細な記録・分析は、古典期マヤ人の日常生活を研究する上で極めて大きな学術的意義をもつ。遺物の分析によって、アグアテカ遺跡が敵襲にあった「最後の時」がより鮮明に復元された。敵がアグアテカ遺跡中心部を徹底的に破壊していることから、戦争の激化が古典期マヤ文明の衰退の重要な要因の一つであったことが実証的に明らかになった。様々な遺物の分析データをコンピュータに入力して統計処理を行うとともに、様々な遺物の空間分布図を作成することによって、特に誰が、住居内外のどこで、何をしたのかについて研究することに重点を置いた。アグアテカ考古学プロジェクトは、古典期マヤ人の日常生活の復元に寄与するだけでなく、住居毎の家族構成、所有物、活動の違いなどを比較することにより古典期マヤの社会経済組織の復元にも大きく寄与することを目指す。

こうした分析及びマヤ文字の解読から、たとえば建造物M7-22は王宮、「鏡の家」(建造物M8-4)及び「石のみの家(石斧の家)」(建造物M8-8)は支配層世帯の住居であったと考えられる[Inomata et al. 2002]。建造物M8-13は、地位の低いマヤ人世帯の住居であった。建造物M7-34の機能は明確ではないが、ポポル・ナ(popol na: 筵の家 = 会議所)であった可能性が高い。建造物M8-2とM8-3は、作業場または支配層の従者の住居であったと考えられる。

多くの支配層住居には核家族的な世帯が住んだと考えられ、その空間利用には一貫性が見られる。ジェンダーに関連した空間利用も認められ、たとえば「鏡の家」と「石のみの家」の北の部屋では、書記の妻が食糧の貯蔵・調理や織物の生産を行った。中央の部屋は、書記の活動の他に訪問者の接待や会議にも用いられた。換言すれば、支配層住居は単なる家族生活の住居空間であったのではなく、政治活動にも利用されていた。つまり宮廷の行政機能は空間的に複数の地位の高い貴族の住居に分散していたのである[Inomata 2001a]。

2002年末までに全ての発掘出土遺物の分析を完了した。遺物の分析データは、コンピュータに入力されデータベース化された。データベースはアグアテカ考古学プロジェクトのホームページで公開される予定である。さらに調査の成果は数冊にわたる研究調査報告書や学術雑誌論文として英語、スペイン語、日本語で出版される予定であり、本稿はその一つとして位置付けられる。アグアテカ遺跡の唯一無二の遺物の出土状況や遺物分析の詳細なデータは、古典期マヤ人の生活に関する前例のない実証的かつ詳細な情報を提供し、今後多くの研究者によって活用されていくと期待される。

### 3. 石器資料と分析方法

筆者は1998年から2002年までに現地で10,788点の全出土石器の属性分析を完了させた[Aoyama 2000, 2001a]。このうち8,293点は打製石器であった。6,130点は地元産チャート製(73.9%)、2,163点は搬入された黒曜石製(26.1%)であり、石材毎に石器組成を検討した(表1、2)。残りの2,495点は磨製石器他の石器であった(表3)。

表1 アグアテカ遺跡出土の黒曜石製石器の組成

	建造物									合計
	M7-22	M8-4	M8-8	M8-13	M8-2	M8-3	M7-32	M7-34	他の発掘区	
石刃	265	410	211	113	113	68	52	291	341	1864
大型石刃	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
小型打撃石刃	0	2	1	0	0	0	0	0	6	9
石刃残核	6	6	2	1	8	2	10	3	7	45
石刃鎌	0	3	2	1	3	1	1	2	5	18
両面調整尖頭器	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2
両面調整剥片	5	0	0	0	0	0	0	0	0	5
剥片・碎片	58	14	15	7	9	3	16	42	43	207
スクレイパー	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
剥片石核	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
小型円形石器	10	0	0	0	0	0	0	0	0	10
合計	345	435	231	122	135	74	79	339	403	2163

M7-22: 王宮; M8-4: 「鏡の家」; M8-8: 「石のみの家」

表2 アグアテカ遺跡出土のチャート製打製石器の組成

	建造物									合計
	M7-22	M8-4	M8-8	M8-13	M8-2	M8-3	M7-32	M7-34	他の発掘区	
両面調整尖頭器	43	39	28	38	17	11	8	19	27	230
楕円形両面調整石器	48	69	39	40	22	17	14	23	55	327
三角形両面調整石器	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
両面調整ピック	2	6	2	0	1	0	0	1	2	14
両面調整剥片	367	263	18	83	51	33	19	44	185	1063
剥片・碎片	441	716	206	291	120	66	105	149	2134	4228
片面調整尖頭器	0	2	2	1	0	0	0	0	0	5
スクレイパー	9	12	3	9	7	0	0	12	15	67
ノッチ	0	1	1	0	1	0	0	0	1	4
鋸歯状石器	1	5	2	0	2	2	0	1	6	19
錐	0	9	0	3	5	0	1	0	8	26
エクセントリック	3	0	0	0	0	0	0	0	2	5
剥片石核	11	27	12	21	9	3	4	9	33	129
両面礫器	1	4	0	1	1	1	0	0	4	12
合計	926	1153	313	487	236	133	152	258	2472	6130

M7-22: 王宮; M8-4: 「鏡の家」; M8-8: 「石のみの家」.

表3 アグアテカ遺跡出土の磨製石器他の組成

	建造物									合計
	M7-22	M8-4	M8-8	M8-13	M8-2	M8-3	M7-32	M7-34	他の発掘区	
叩石	4	17	5	14	4	0	5	7	12	68
磨石	19	65	64	26	11	2	9	14	1316	1526
磨石・叩石	1	3	1	2	0	1	2	0	3	13
漆喰スモージー	3	8	5	3	1	3	4	4	9	40
石皿	1	13	1	1	0	0	1	0	0	17
精製磨石	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
石のみ	7	7	22	2	0	0	0	2	6	46
パークビーター	1	0	2	0	0	0	1	0	1	5
その他	3	5	4	0	0	1	0	1	6	20
小計	39	120	104	48	16	7	22	28	1353	1737
搬入自然石	104	80	90	15	18	14	14	32	391	758
合計	143	200	194	63	34	21	36	60	1744	2495

M7-22:王宮; M8-4:「鏡の家」; M8-8:「石のみの家」.

全出土石器の中で建造物内部の中詰の一部（層位4、5）として使われた二次堆積石器は、わずかに146点である。表1-3に集計した8建造物跡出土石器のデータでは、二次堆積石器を除外してある。一次堆積遺物は必ずしも古典期後期末のマヤ支配層の生活の「最後の時」の原位置から出土したとは限らないが、特定の出土空間の機能をほぼ直接反映すると考えられる。床面直上（層位3）から出土した石器は、一次堆積石器の64.5%（N=3,981）を占める。その他の表土（層位1）及びその下の壁の倒壊層（層位2）から出土した石器の大部分は、元々建造物の柵や梁のような高所に置かれていた蓋然性が高い[Inomata et al. 2002: 309]。

筆者は、2001年と2002年に建造物内や建造物間の石器の製作・流通・消費を研究するために、石材、母岩毎に石器の体系的な接合を行った。黒曜石製石器の原産地は、中性子放射化分析と肉眼観察を組み合わせることで同定した[Aoyama 1999: 27-33]。肉眼による原産地同定の精度確認のためのブラインド・テストとして、無作為抽出された100点の黒曜石製石器の中性子放射化分析がミズーリ大学で行われ98%の精度を示した[Aoyama 1999]。さらに筆者を含めた4人の研究者によるブラインド・テストによって、肉眼による原産地同定の高い精度が再確認され、この同定法が反復可能な分析法であることが実証された[Braswell, Clark, Aoyama et al. 2000]。

高倍率の金属顕微鏡を用いて2,422点の石器の使用痕分析を行った。これらの石器はグアテマラ国立人類学歴史学研究所から借り受けて日本に持ち帰り、茨城大学の研究室で分析した。このうち2,392点は黒曜石製（N=1,064）とチャート製（N=1,328）の打製石器であり、全打製石器の約30%を占める。その上30点の磨製石のみの使用痕を分析した。筆者は、ホンジュラスのラ・エントラーダ地域で1987年に行った黒曜石とチャート製の計267点の複製石器による体系的な実験使用痕研究に基づき、古代マヤ石器の使用痕研究の方法論的枠組を確立した。実験プログラムの詳細については別稿を参照いただきたい[Aoyama 1989]。この方法論的枠組を、コパン谷とラ・エントラーダ地域

出土の計 3,232 点の石器の使用痕分析[青山 1997, Aoyama 1995, 1999, 2001b]、さらにアグアテカ遺跡出土の石器の使用痕分析に適用した。

使用痕の観察にはオリンパス BHM 型落射照明付金属顕微鏡 (OLYMPUS BX60M) を用い、100 倍から 500 倍、特に 200 倍で行い、各石器の使用部位、操作法、被加工物といった石器の機能の基礎データを抽出した。35 ミリ・カメラ (OLYMPUS C-35DA-2) を搭載した顕微鏡写真撮影装置 (OLYMPUS PM-10M) を用いて、使用痕が認められる部位を中心に、カラーズライド及び白黒写真を撮影した。使用部位は、光沢面、線状痕と微小剥離痕の分布を総合して判断する。とりわけ、微小剥離痕、方向に規則性のある線状痕と光沢が同時に観察される部位が同時に観察される場合にはほとんど誤りなく使用部位として同定される。操作法は、線状痕、微小剥離痕、光沢面の分布、石器の形態、刃角を総合して判断する。特に光沢面上に観察される線状痕が最大の手掛かりである。

被加工物の推定は、微小剥離痕と線状痕の分布を考慮しつつ、主に使用痕光沢面の特徴と分布による。Keeley によれば、チャートの光沢面タイプと被加工物には一対一の対応関係があり、被加工物の名前を冠して「骨光沢」、「皮光沢」、「木光沢」などと呼称した[Keeley 1980]。メソアメリカ考古学において高倍率の金属顕微鏡を用いた石器の使用痕研究のパイオニアである Suzanne Lewenstein も、Keeley の分類を基本的に踏襲している[Lewenstein 1987]。しかし、その後の研究によると、各光沢面タイプは被加工物と排他的な対応ではなく、確率的な対応を示した。また、中間的な光沢面タイプも存在し、操作法、作業量、被加工物の状態なども光沢面形成に影響することが明らかになった[梶原・阿子島 1981; Vaughan 1985]。特に被加工物の同定が可能な特徴的な光沢面が未発達な場合、異なった被加工物と異なった操作法によって似通った光沢面が観察される場合がある。さらに使用痕光沢面の形成機構が磨耗であり、その特徴が主に被加工物の硬さ、粘弾性的性質、表面状態で決定されることが解明された[山田 1987]。

筆者もかつて所属していた東北大学石器使用痕研究チームは、頁岩に観察される光沢面を 11 のタイプに分類した[梶原・阿子島 1981]。当分類は、ラ・エントラダ地域における 116 点のチャート製複製実験石器の使用痕分析の結果、チャートにも適用されることが明らかになった(図 3)。一方黒曜石は火山ガラスであり、シリカ質堆積岩の表面よりも柔らかく傷つきやすいために、より多くの線状痕が形成される。一般的に黒曜石の光沢面は、シリカ質堆積岩のそれよりも広範囲に広がる(図 4)。したがって、筆者は黒曜石の使用痕を光沢面、線状痕、小ピットを総合的に観察して 11 のパターンに分類した。使用痕のパターンの詳細については別稿を参照いただきたい[Aoyama 1989, 青山 1997]。

#### 4. 石材の獲得及び石器の生産・流通

アグアテカの住人は、黒曜石を少なくともグアテマラ高地のエル・チャヤル、イシュテペケ、サン・マルティン・ヒロテペケの 3 つの原産地から搬入した。黒曜石製石器の約 96% (N=2,078) がエル・チャヤル産である。わずか 85 点の黒曜石製石器が、イシュテペケ産 (2.8%、N=60) 及びサン・マルティン・ヒロテペケ産 (1.2%、N=25) であった。

エル・チャヤル産黒曜石製石刃残核の破片 (N=45) は出土しているが、イシュテペケ産及びサン・マルティン・ヒロテペケ産のものは出土していない。エル・チャヤル産黒曜石製石器の自然面

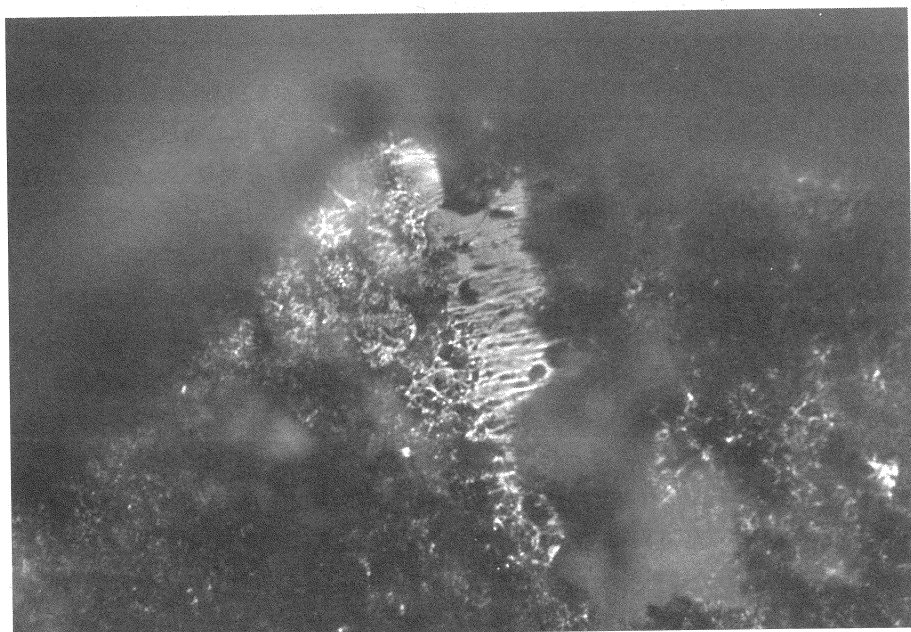


図3 アグアテカ遺跡出土のチャート製剥片の使用痕  
(D2タイプ, 貝・骨の切断, 200倍)

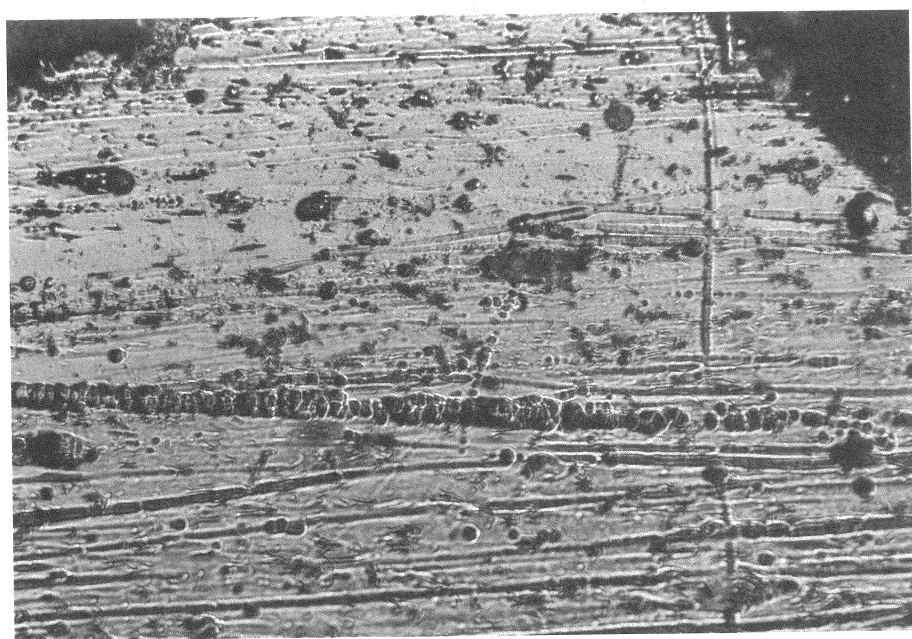


図4 アグアテカ遺跡出土の黒曜石製石刃の使用痕 (パターンb, 木の切断, 200倍)

残存率は、0.6% (N=12) と極めて低い。また、石刃核の石刃剥離作業面を調整する際に打撃剥離される大型石刃 (N=1) や小型打撃石刃 (small percussion blade : 石刃状剥片, N=9) が極めて少ない。逆に石刃の比率が極めて高い (86.5%, N=1,797)。こうしたことから、エル・チャヤル産黒曜石は、主にあらかじめ整形された石刃石核としてアグアテカに搬入されたと考えられる。

一部の支配層世帯が主に押圧剥離により定型的な石刃を生産し、他の世帯に流通した。定型的な石刃は全黒曜石製石器の約 86.2% を占め、各支配層世帯で消費された (表 1)。大部分の石刃は、二つか三つに折って使われた実用品であった。図 5 : 1-2 の 2 点の石刃片は接合されたが、それぞれ別の建造物から出土した。打点側の石刃片は、支配層の住居跡であった「石のみの家」(建造物 M8-8) で見つかった。しかし先端部の石刃片は、地位の低いマヤ人の住居跡であった建造物 M8-13 から出土した。前者の住人から後者の世帯に石刃片が交換されたと考えられる。換言すれば、各世帯で自前に全ての石器を製作していなかったことを示唆する。いずれにせよ、アグアテカ遺跡出土の黒曜石製石器のデータは、先コロンブス期メソアメリカでは黒曜石製石刃核の獲得や石刃の生産・流通

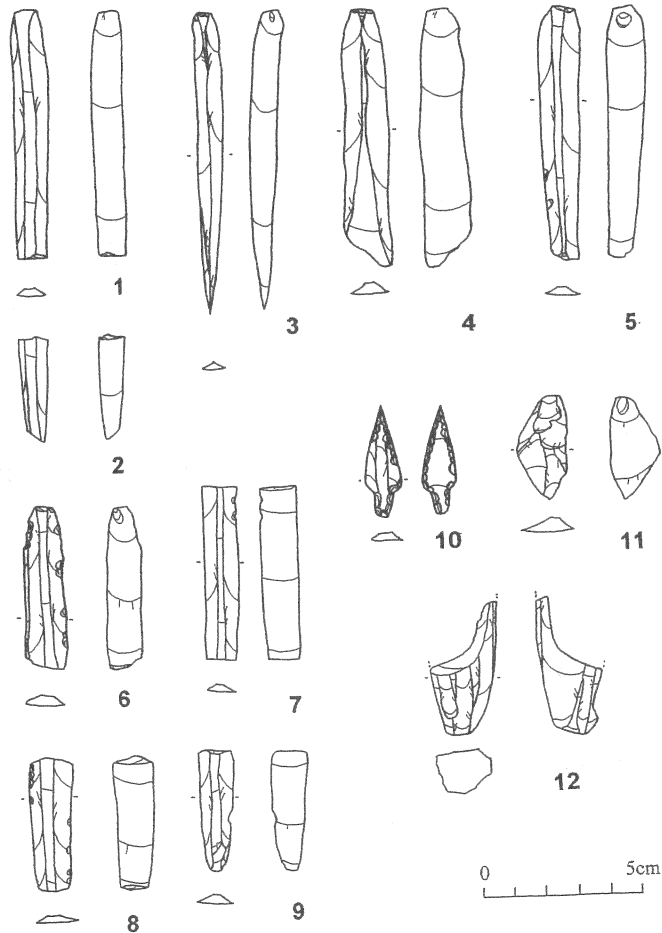


図 5 アグアテカ遺跡の黒曜石製石器

1-9 : 石刃, 10 : 石刃鎌 ; 11 : 剥片, 12 : 石刃残核

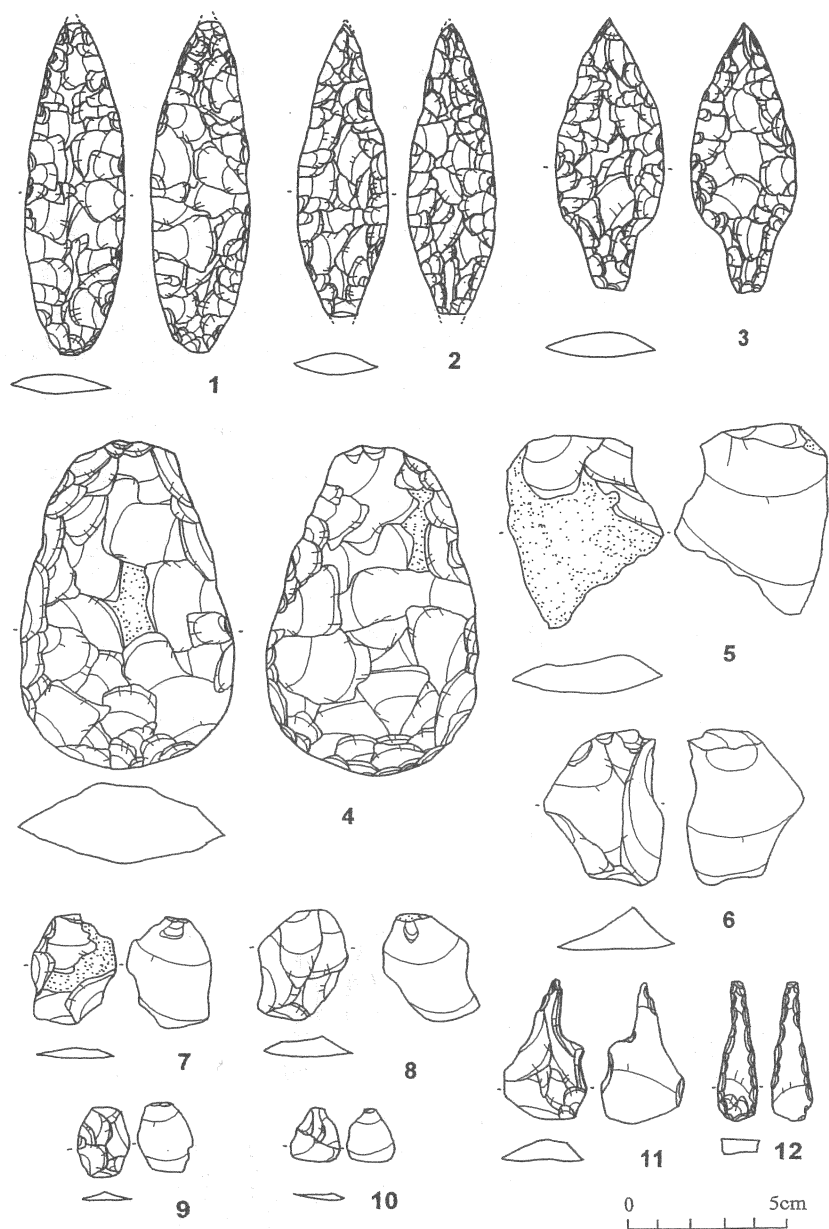


図6 アグアテカ遺跡出土のチャート製石器

1-3 : 両面調整尖頭器, 4 : 楕円形両面調整石器 ; 5・6 : 剥片 ;

7-10 : 両面調整剥片 ; 11・12 : 錐

は支配層によって統御されていたという仮説を支持する [青山 1993, 1998, Aoyama 1994, 2001c; Clark 1987; Sheets 1983; Spence 1984]。

地元産チャートから製作された石器もまた主に実用品であった (図6)。各支配層世帯で最も多く製作されたのは、直接打撃により剥離された剥片であった (表2)。こうした不定形の剥片・碎片が、



チャート製石器の大部分を占める (69%、N=4,228)。叩石は、各住居跡から出土している (表 3)。チャート製定型石器では、両面調整尖頭器や楕円形両面調整石器のような両面調整石器が多いのが特徴である。アグアテカ遺跡出土の両面調整剥片のチャート製石器に占める比率 (17.3%、N=1,063) は、たとえば古典期後期のコパン谷の比率 (4.1%、109/2,652) よりもはるかに高い。コパン谷では両面調整尖頭器は製作されたが、地元産チャートの大きな母岩が豊富であるにもかかわらず楕円形両面調整石器は生産されなかった[Aoyama 1999: Table 8.1]。このことは、古典期マヤ文明の多様性の一面を示している。いずれにせよ、書記兼工芸家をはじめとする少なくとも一部のアグアテカの支配層が、こうした主に実用品であった石器を半専門生産したと考えられる。

## 5. 石器の機能

### 5-1. アグアテカ遺跡出土石器の表面変化と使用石器

アグアテカの支配層住居跡の多くが古典期後期末に敵の急襲を受けて火災を被ったために [Inomata 1997]、火災による石器の表面変化の状態は使用痕分析を行う上で重要である。高倍率の金属顕微鏡による石器の詳細な観察の結果、火災による石器表面の変化は予想よりも少ないことが確認された。分析された 2,422 点の石器のうち火災による何らかの表面変化が認められたのは 311 点であった。しかしそのうち 87 点だけが、使用痕観察が不可能なほど火災によって表面変化を受けていた (表 4)。火災による表面変化は、チャート製石器よりも黒曜石製石器により多く観察された。使用痕観察が不可能なほど火災によって表面変化を受けていた石器は、チャート製石器 5 点 (0.4%) に比べて黒曜石製石器では 82 点にのぼった (7.7%)。なお 30 点の磨製石のみ全点に関しては、火災による表面変化は全く認められなかった (図 7)。

石器埋没後の表面変化の一種である白色のパティナと輝斑 [Levi-Sala 1986] は、ほとんど観察されなかった。使用痕分析の妨げにならない程度の微弱な埋没光沢が、数点のチャート製石器に認めら

表 4 建造物・発掘区別のアグアテカ遺跡出土石器の火災による表面変化

建造物・発掘区	軽度	%	使用痕観察不能	%	合計	%
建造物M8-13	16	6.6	7	2.9	23	9.5
建造物M8-8	16	5.1	21	6.6	37	11.7
建造物M7-34	13	4.9	9	3.4	22	8.2
建造物M7-22	68	17.5	30	7.7	98	25.3
建造物M7-32	7	9.3	2	2.7	9	12
建造物M8-4	54	9.7	4	0.7	58	10.4
建造物M8-2	24	18	6	4.5	30	22.6
建造物M8-3	16	13	6	4.9	22	17.9
他の発掘区	1	0.3	1	0.3	2	0.6
合計	224	9.2	87	3.6	311	12.8

れたにすぎなかった。つまり、埋没後の石器表面変化により分析不可能な資料は皆無であった。その結果全部で 2,336 点の石器が、使用痕の観察が可能な状態にあることが確認された。使用痕が観察されない石器については、①未使用であったか、②使用期間が短かったために高倍率の金属顕微鏡を用いても観察可能な使用痕が形成されなかったか、の 2 つの可能性が考えられる。そうした石器は、分析の上では「未使用」と分類した。

使用痕観察が不可能なほど火災によって表面変化を受けなかった 2,336 点の石器のうち、1,308 点 (56%) において使用痕が観察された。つまり、少なくとも 857 点の黒曜石製石器 (87.2%) が使用されたのに対して、422 点のチャート製石器 (31.9%) に使用痕が同定された。一般的に、チャート製石器のライフ・ヒストリーは、黒曜石製石器のそれよりも短かったと考えられる。刃部が欠落した 1 点を除く全ての磨製石のみ (石斧) 29 点に使用痕が観察された。

Patrick Vaughan[Vaughan 1985: 56-57]に従い、同定可能な使用痕が観察される石器の各部位を使用部分 (IUZ: Independent Use Zone) として算定した。その結果、全部で 2,662 カ所の使用部分を確認した。各石器縁辺で、被加工物あるいは操作を二種類以上同定した場合は、それぞれ別の独立した使用部分として算定した。表 5 は、被加工物と操作法の相関関係を示している。

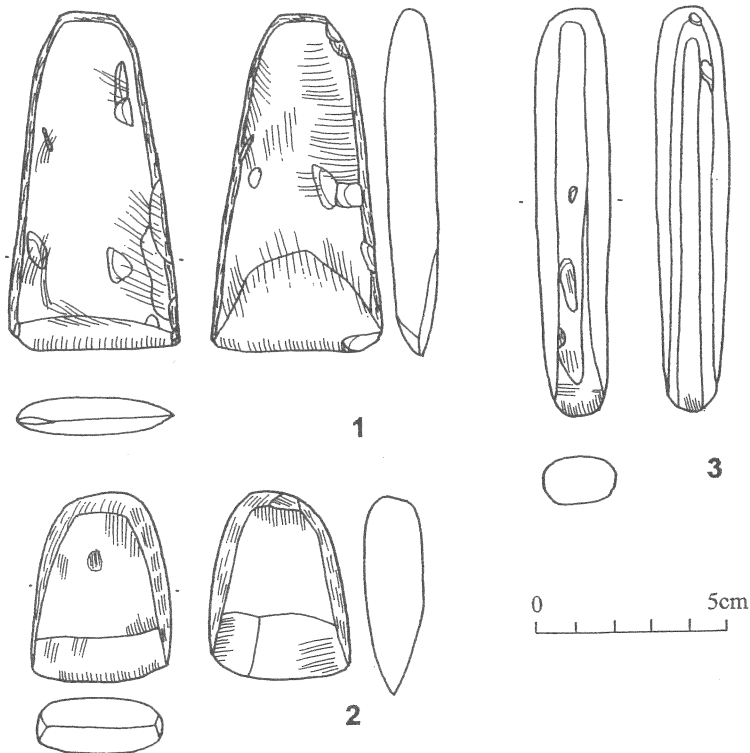


図7 アグアテカ遺跡の「石のみの家」(建造物M8-8)出土の硬質緑色岩製磨製石のみ

表 5 アグアテカ遺跡出土石器の推定作業

被加工物	操作法	切断	削り	掻き取り	刺突	削り	穿孔	掘り	同定不能	合計
木・その他の植物		667	239	0	1	2	1	0	0	910
肉・皮		685	0	181	34	0	7	0	0	907
石		0	0	0	127	0	0	0	0	127
貝・骨		56	37	0	0	15	4	0	0	112
イネ科の植物		4	0	0	0	0	0	0	0	4
土		0	0	0	0	0	0	3	0	3
同定不能		465	74	0	18	2	1	0	41	601
合計		1877	350	181	180	19	13	3	41	2664

### 5-2. 石器の石材・型式と機能

黒曜石製石器（使用部分：2,002）とチャート製石器（使用部分：633）における被加工物の比率を比較すると、大きな差異が認められる（図 8）。黒曜石製石器は木・他の植物の切断、削り（43%）、肉・皮の切断、掻き取り（30.8%）、貝・骨の切断（0.1%）、同定不能の被加工物の切断、削り（26.1%）に使用された。それに対して、チャート製石器はより広範な作業に用いられた。肉・皮の切断、掻き取り、刺突（46%）が一番多く、貝・骨の切断、削り、溝切り（17.2%）、石の加工（15.5%）、木・他の植物の切断、削り、溝切り（7.7%）、イネ科の植物の切断（0.6%）、土掘り（0.5%）、同定不能の被加工物の切断、削り、掻き取り、溝掘り、刺突（12.5%）と続く。

黒曜石製石刃（使用部分：1,899）は、各支配層世帯で主に木製品や皮製品の手工業生産、さらに調理などの作業に用いられた多機能の実用品であった（図 5：1-9）。石刃で木・他の植物の切断、削り（42.2%）、肉・皮の切断、掻き取り（31%）、同定不能の被加工物（26.5%）などが行われた（図 4）。放血儀礼などの儀礼に使用された石刃は、ごく一部にしかすぎなかった。

チャート製石器に関する、当然のことながら全ての剥片が石屑であったのではなかった（図 9）。使用されたチャート製剥片は、多機能を有した不定形石器であった（図 6：5-6）。こうした剥片は、主に皮製品の製作や調理の他に、骨製品、貝製品、木製品の手工業生産や石の加工に用いられた（図 3）。推定作業（使用部分：211）としては、肉・皮の切断、掻き取り、穿孔、刺突（54%）が最も多く、貝・骨の削り、切断、溝切り（23.2%）、木・その他の植物の切断、削り、溝切り、穿孔（6.2%）、石の加工（0.9%）、同定不能の被加工物の掻き取り、削り、切断、溝切り（15.6%）が挙げられる。

チャート製楕円形両面調整石器もまた多機能石器であった（図 6：4）。主に石の加工に用いられ、さらに皮製品、木製品、骨製品、貝製品の手工業生産、調理や土掘りに用いられた。推定作業（使用部分：120）では石の加工が3分の2を占め（66.7%）、肉・皮の切断、掻き取り（16.7%）、木・その他の植物の切断（7.5%）、貝・骨の切断（3.3%）、土掘り（2.5%）、同定不能の被加工物の切断（3.3%）と続く（図 9）。

使用痕分析によって、全ての両面調整尖頭器が武器（石槍）としてのみ使用されたわけではなか

ったことが明らかになった(図6:1-3)。一部の両面調整尖頭器は武器としてだけでなく、骨製品、貝製品、木製品などの手工業生産やその他の日常生活の活動にも使用されたのである(図10)。両面調整尖頭器の尖頭部は、肉・皮の刺突だけでなく、貝・骨の穿孔にも用いられた。一方、その両刃縁部は、肉・皮、木・その他の植物、貝・骨、イネ科の植物の切断及び貝・骨の溝切りに使用された。両面調整尖頭器の推定作業(使用部分:141)としては、肉・皮の切断、刺突(55.3%)が大半を占めるものの、木・その他の植物の切断(16.3%)、貝・骨の切断、溝切り、穿孔(11.3%)、イネ科の植物の切断(2.1%)、同定不能の被加工物の切断、刺突(14.9%)があった。30点から40点前後の両面調整尖頭器が、王宮及び支配層書記の住居跡から出土している(表2)。王または支配層書記がその一部を使用していたとすると、王及び支配層書記の中には戦士兼工芸家でもあった人物もいたと考えられる。

いずれにせよ、アグアテカ遺跡出土のチャート製石器中の両面調整尖頭器の比率(3.8%、N=230)はこれまでに報告されているいかなるマヤ低地の遺跡のそれよりも高い。この比率は、全面発掘された8基の建造物跡から出土したチャート製石器では5.5%(N=203)とさらに高くなる。これに対して、たとえば古典期後期のコパン谷では両面調整尖頭器の比率はわずか0.5%(13/2,652[Aoyama 1999: Table 8.1])であり、コパン谷から40kmほどのラ・エントラーダ地域では0.6%(19/3,291[Aoyama 1999: Table 8.3])である。このことは、敵がアグアテカ遺跡中心部を徹底的に破壊していることと共に、戦争の激化が古典期マヤ文明の衰退の重要な要因の一つであったことを示唆する。

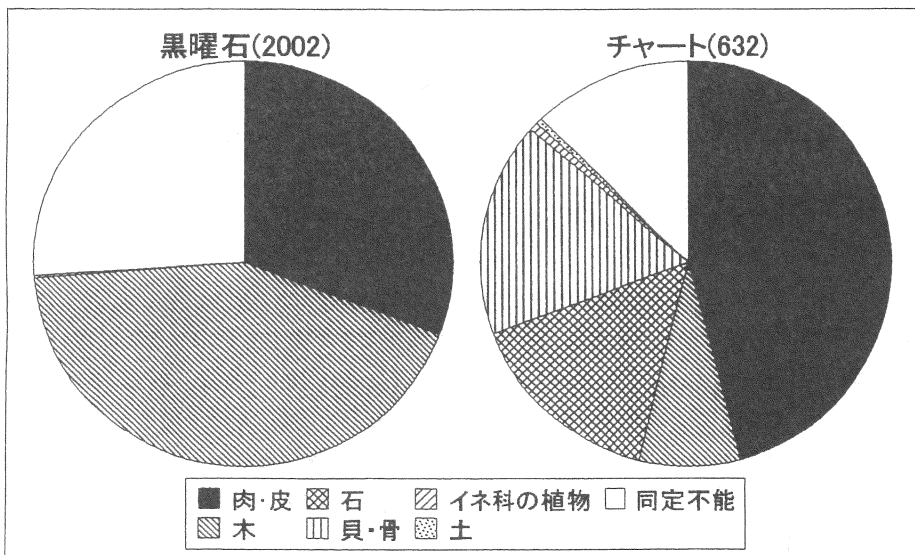


図8 アグアテカ遺跡出土の黒曜石製石器とチャート製石器の被加工物

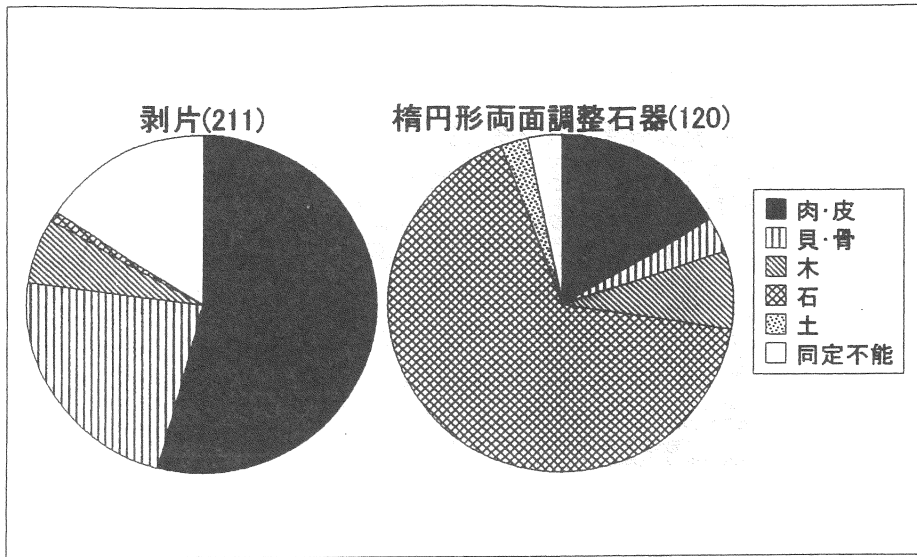


図9 アグアテカ遺跡出土のチャート製剥片と楕円形両面調整石器の被加工物

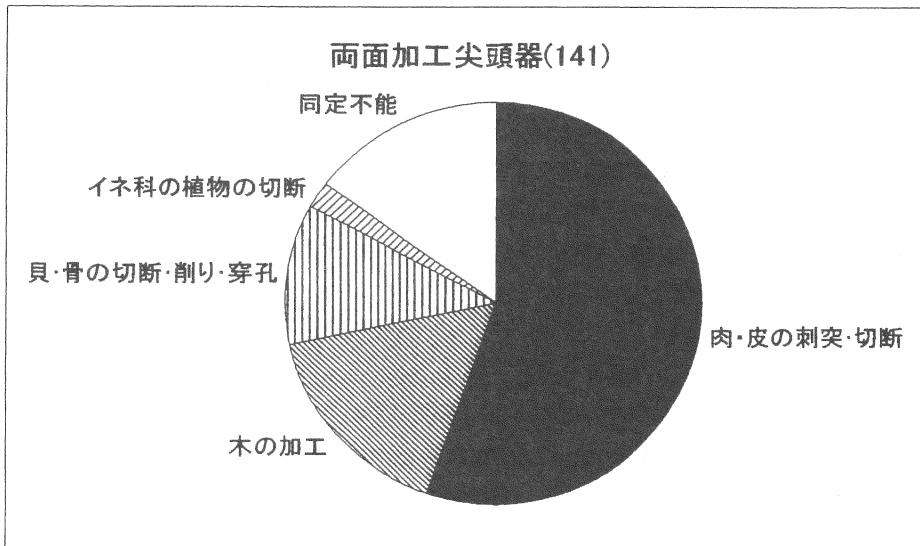


図10 アグアテカ遺跡出土のチャート製両面調整尖頭器の推定作業

## 6. 石器による手工業生産の変異性

図11は石器の推定作業の変異性を示すために、アグアテカ遺跡の様々な発掘区から出土した石器の被加工物の比率を示している(使用部分に関するデータは表6を参照)。いずれの場合も、木・その他の植物及び肉・皮の加工が大部分を占める。これに比べると、貝・骨製品の製作、石の加工に用いられた石器は少ない。イネ科の植物の切断、土掘り及び放血儀礼に用いられた石器はさらに限

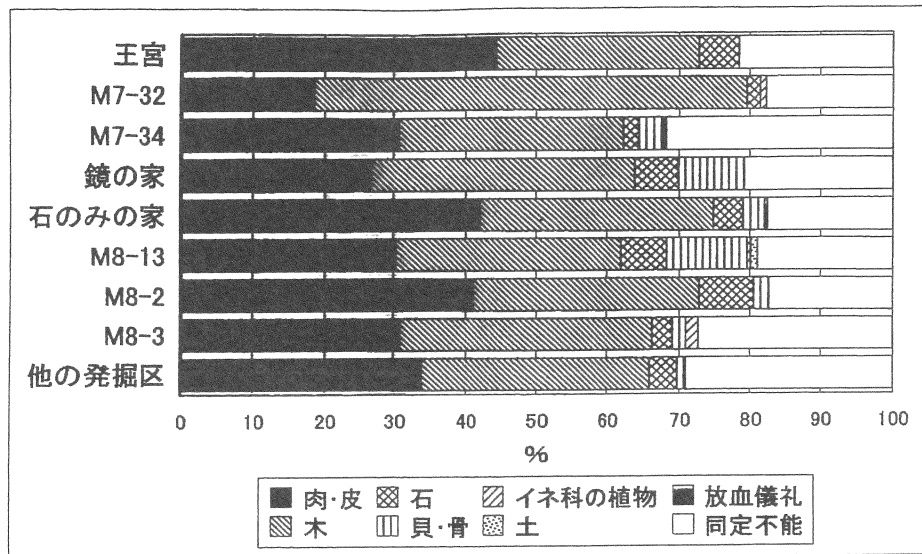


図 11 アグアテカ遺跡の発掘区毎の石器の被加工物

定されている。石の加工は全面発掘された全ての 8 建造物跡から出土した石器に同定されたが、貝・骨製品の製作は 6 建造物跡においてのみ確認された。イネ科の植物の切断は 3 建造物跡、土掘りは 2 建造物跡、放血儀礼は 1 建造物跡だけで同定された。ここでは古典期マヤ支配層世帯の手工業生産とその他の日常生活の諸活動の変異性を検証するために、出土遺物から住居跡であることが確認された 4 基（建造物 M7-22、M8-4、M8-8、M8-13）の複数の部屋の有する建造物跡から出土した石器群を中心に検討する。

#### 6-1. 建造物 M8-13

建造物 M8-13 は、西の部屋、中央の部屋、東の部屋の 3 部屋から構成されていた。各部屋に住人が座ったり寝たりしたベンチがあった。西の部屋からは食糧貯蔵用の実用土器やメタテ・マノといった製粉石器が出土しており、食糧の貯蔵・調理に主に利用されたと考えられる。中央の部屋はより大きく、比較的遺物の出土量が少ないことから、会議や訪問者の接待に用いられた蓋然性が高い。建造物 M8-13 では、「鏡の家」（建造物 M8-4）や「石のみの家」（建造物 M8-8）のような支配層住居跡と同様に、食糧の貯蔵・調理・飲食をはじめとする広範な日常活動が行われた。しかし建造物の造りが粗雑であり、建築石材の加工度も粗い。翡翠製品や貝製装飾品のような奢侈品の出土数が極めて少ない。建造物 M8-13 は、地位の低いマヤ人の核家族的な世帯の住居跡であったと考えられる [Inomata et al. 2002: 321]。また地位の高い支配層住居跡と比べると、石刃をはじめとする黒曜石製石器の出土数も少ない（表 1）。黒曜石と同じくアグアテカに搬入された磨製石のみは、わずか 2 点だけである（表 3）。

建造物 M8-13 から出土した石器（使用部分：211）を用いて、皮製品、木製品、骨製品の手工業

生産や調理などが行われた。とりわけ、木・その他の植物 (31.8%) と肉・皮 (30.3%) の加工が大半を占める (図 11)。また他の支配層住居跡では検出されなかった草刈や土掘りも行われた。このことは、建造物M8-13に住んだ世帯の社会的地位の低さと関連していると考えられる。

一方で、骨または貝の加工の高い比率 (11.4%) が注目される。動物考古学者 Kitty Emery の動物遺存体の分析によれば、建造物M8-13 から骨製実用品の未製品及び製作屑が大量に出土している。しかし、貝製装飾品の未製品や製作屑は検出されなかった[Emery 2000]。つまり骨または貝に用いられたと同定された石器は、貝ではなく骨製実用品の製作に用いられたと考えられる。骨製品の製作に用いられた石器は、建造物M8-13 の西の部屋、建造物正面、建造物の後面から出土した。

民族考古学の活動域の研究によれば、多くの先産業社会では世帯の活動の大部分が戸外で行われた[Kent 1984]。上述のようにアグアテカ遺跡出土の遺物の場合も、その大部分は使用時よりも保管時の状態を示し、実際の製作活動は戸外で行われることが多かったと推定される。建造物M8-13 の後面から出土した石器は、大量の骨製実用品の未製品及び製作屑と共伴していた。したがって、少なくとも建造物の後面が骨製実用品製作の作業場であった蓋然性が高い。こうした骨製実用品の生産は、アグアテカの外への輸出を示唆するような大規模なものではなかったが、少なくとも生産者世帯の需要を越えた半専業生産であったと考えられる。

## 6-2. 「石のみの家」(建造物M8-8)

建造物M8-8 は、大小様々な大きさの磨製石のみ (石斧) が出土したために「石のみの家」と呼ばれている (図 7)。支配層の核家族的な世帯が住んだと考えられる。書記が顔料を準備したと考えられる石皿や紙を製作したパークビーター (barkbeater) が出土しており、世帯主が書記の業務に従事していたことがわかる (表 3)。「石のみの家」は、北の部屋、中央の部屋、南の部屋の 3 つの大きな部屋に加えて、両脇に北の小部屋と南の小部屋を有した。3 つの大きな部屋にはベンチがあったが、両脇の小部屋にはなかった。出土遺物の分布から、中央の部屋は書記が訪問者の接待や会議に用い、南の部屋では住人が主に座ったり寝たりしたと考えられる。北の小部屋は、倉庫兼作業場であったと推測される。北の部屋内と正面からは、メタテ、マノ、調理・貯蔵用土器、紡錘車などが大量に出土している。北の部屋は主に食糧の貯蔵・調理に使用された。図像資料や現代マヤ人の民族誌のデータから、女性が衣類の製作に従事したと推測される。女性、つまり書記の妻が主に北の部屋を使っていた蓋然性が高い。また南の小部屋からは紡錘車や貯蔵用土器やメタテ・マノが出土した。書記の妻が使った道具類の倉庫であったと考えられる[Inomata et al. 2002: 318-320]。

石のみはアグアテカ遺跡の全ての発掘区で見ついているわけではなく、支配層に関連した遺構、特に支配層住居跡から出土している。これに対して、作業場または支配層の従者の住居であったと考えられる建造物M8-2 とM8-3 からは全く出土しなかった。「石のみの家」からは最多の 22 点の磨製石のみが見つかった (図 12)。北の小部屋の内外からの出土量が特に多い。使用痕分析により、これらの石のみが石の加工に用いられたことが明らかになった。アグアテカ遺跡には石碑以外の石造彫刻が皆無であることから、これらの磨製石のみは石碑を彫るための道具セットであった蓋然性が高い。換言すれば、「石のみの家」の書記は王のために石碑を彫った半専業の彫刻家でもあったのである。石碑の彫刻はアグアテカで石碑が集中的に建立された中央広場で行われたと考えられる。

「石のみの家」からの直線距離は、250mほどであった。

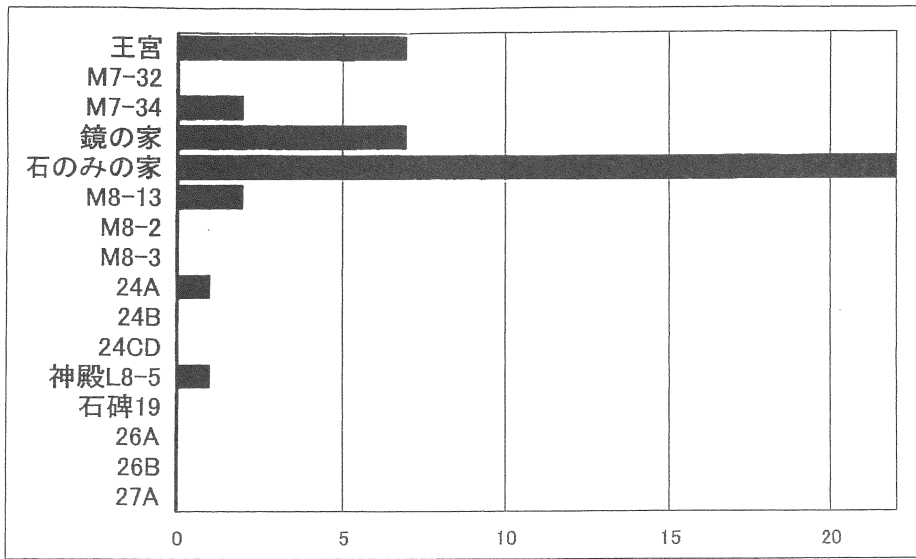


図 12 アグアテカ遺跡の発掘区毎の磨製石のみ出土数

これらの磨製石のみは、21点が硬質緑色石製、1点が薄緑色翡翠製である。磨製石のみの母岩としてこうした石材が選択されたのは、ただ単に石灰岩よりも硬いという実践的な理由だけではなくと筆者は考える。緑色は、古代マヤ人の宇宙観では宇宙の中心の色であった[Miller and Taube 1993: 65]。緑色の磨製石のみの色自体が社会的・象徴的な意味をもっていた蓋然性が高い。つまり、王の偉業を称える石碑を彫るにあたって、緑色の磨製石のみには特別な意味が込められていたと考えられる。

Karl Taube は、コパン遺跡の支配層住居区「ラス・セプトウラス地区」の住居グループ 9M-22 が「石彫の家」であったと考える[Houston 2000: 150 に引用]。この住居グループは、有名な「書記の家」がある住居グループ 9N-8 の近くにあり、建物に彫刻道具と石彫の紋章 K'an tu:n が彫刻されている。Stephen Houston[2000: 150]は、アグアテカ遺跡の「石のみの家」も「石彫の家」の一例であるとする。しかし、より正確には「石碑彫刻の家」であった。こうした石碑彫刻家は高い社会的地位を有していたと考えられる。マヤ文字の解読によれば、少なくとも一部の石造彫刻家と熟練した土器製作者のようにマヤ人芸術家の中には非常に高い地位の者もいた[Stuart 1993: 323]。

「石のみの家」出土の石器（使用部分：427）は、肉・皮の加工（42.2%）に最も多く使われ、木・その他の植物の加工（32.8%）が続く（表 6）。しかし、貝・骨の加工の比率（2.8%）は低い。書記は、石碑彫刻の他に、皮製品、木製品、貝製品、骨製品といった実用品や工芸品の生産にも従事したと考えられる。

中央の部屋のベンチの床面直上から出土した完形の黒曜石製石刃には、光沢や線状痕のような顕著な使用痕は発達しておらず、数回使用した時に特徴的な微小剥離痕しか使用痕が認められなかった。中央の部屋に居住した書記兼工芸家が、これらの石刃を一回きりの放血儀礼のために使用したと考えられる（図 13）。石碑の彫刻に重点を置いた書記兼工芸家は、中央の部屋で行政・宗教的な



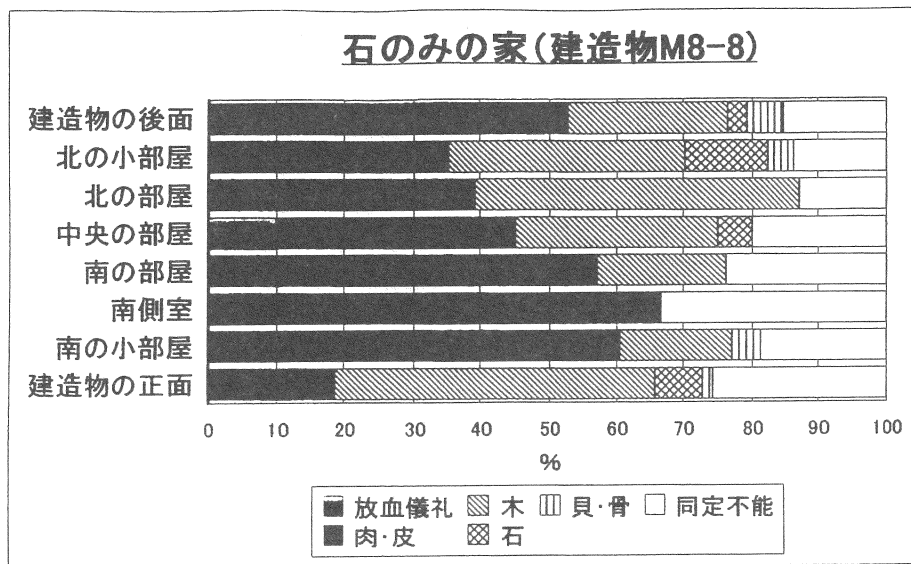


図 13 アグアテカ遺跡の「石のみの家」(建造物M8-8) 出土石器の被加工物

業務に従事しただけでなく、放血儀礼のような儀礼も行っただと思われる。なお光沢と線状痕を伴わない同様な微小剥離痕は、古典期のコパンの中心グループ、支配層住居、一般庶民が儀礼を行った洞窟から出土した少数の黒曜石製石刃に認められた[Aoyama 1999: 131, 2001b]。使用痕のデータによれば、一部の支配層及び一般庶民の古典期マヤ人が極めてごく稀に放血儀礼を行ったと解釈される。

さらにジェンダー別の活動に注目すると、北の部屋から出土した石器は肉・皮の加工に用いられており、書記の妻が調理に用いたと推定される。しかし北の部屋から出土した石器は、調理の他に木製品の加工に用いられた(図 13)。また南の小部屋から出土した石器を用いて、調理に加えて木製品や貝・骨製品が生産された。すなわち、書記の妻は調理だけでなく、少なくとも一部の手工業生産に従事していたのである。

### 6-3. 「鏡の家」(建造物M8-4)

建造物M8-4(「鏡の家」)は、支配層書記の住居跡であり王家が居住した宮殿グループに隣接している(図 2)。黄鉄鉱製モザイク鏡が出土したので「鏡の家」と呼ばれている。北の部屋、中央の部屋、南の部屋の3つの大きな部屋にはベンチがあり、各部屋はほぼ中央の薄い壁によって、前部と後部に分けられていた。「鏡の家」からは大量の貝製・骨製装飾品、未製品や製作屑が出土している。アグアテカの紋章文字をはじめとする、マヤ文字の碑文が刻まれた骨製品が見つかり、住人が高い地位の宮廷人であったことがわかる。高い地位の書記の核家族的な世帯が住んだと考えられる。北の部屋は書記の妻が主に食糧の貯蔵・調理に用いた。ここからは、紡錘車、メタテ、マノ、調理・貯蔵用土器など女性に関連した遺物が主に出土している。中央の部屋の前部や南の部屋の正面から、書記が顔料などを準備したと考えられる13点の石皿及び2点の摺り石が出土している[Inomata et al. 2002: 310-318]。

表 6 建造物・発掘区域毎のアグアテカ遺跡出土石器の被加工物

被加工物 建造物・発掘区	木・他の植物	肉・皮	石	貝	イネ科の植物	土	放血儀礼	同定不能	合計
建造物M8-13	67	64	13	24	1	2	0	40	211
建造物M8-8	140	180	18	12	0	0	2	75	427
建造物M7-34	88	85	6	9	0	1	0	88	277
建造物M7-22	79	125	16	0	0	0	0	60	280
建造物M7-32	69	21	2	0	1	0	0	20	113
建造物M8-4	219	158	35	55	0	0	0	122	589
建造物M8-2	75	97	18	5	0	0	0	41	236
建造物M8-3	39	34	3	2	2	0	0	30	110
他の発掘区	134	143	16	5	0	0	0	123	421
合計	910	907	127	112	4	3	2	599	2664

「鏡の家」出土の黒曜石製石器 (N=435)、チャート製石器 (N=1,053) 及びその他の石器 (N=200) は、支配層居住区の住居跡の中でそれぞれ一番多い (表 1-3)。発掘区域面積 1 m<sup>2</sup> 当りの全石器出土量においても、「鏡の家」(8.8 点/m<sup>2</sup>) が最も高い (平均 5.1 点/m<sup>2</sup>、標準偏差 2.6 点/m<sup>2</sup>)。このことは、「鏡の家」の世帯の地位の高さ、「鏡の家」の世帯が未使用の石器をより多く貯蔵できたこと、あるいはまた「鏡の家」の世帯がその他の世帯よりも手工業生産に強く関わっていたことを示唆する。「鏡の家」出土の石器には、全部で 589 カ所の使用部分が同定された (表 6)。他の支配層住居と同様に、木製品、皮製品、石の加工に使用されたが、とりわけ貝・骨製装飾品の生産 (9.3%) が重点的に行われた (図 11)。石器の被加工物に関しては、上述の「石のみの家」と比べて、木・その他の植物の加工 (37.2%) が肉・皮の加工 (26.8%) よりも高いことが注目される。「鏡の家」では木製品もかなり生産されたと考えられる。

「鏡の家」からは「石のみの家」について、全部で 7 点の硬質緑色石製磨製石のみが出土している (図 12)。使用痕分析によれば、全て石の加工に使用された。上述のように、アグアテカ遺跡には石碑以外の石造彫刻が皆無であることから、これらの磨製石のみは石碑を彫るための道具であった蓋然性が高い。換言すれば、「鏡の家」の住人も王のための石碑彫刻にかかわっていたと考えられる。

図 14 は、「鏡の家」の様々な場所から出土した石器の被加工物の比率を示している。木・その他の植物及び肉・皮の加工はその全てで検出された。貝・骨及び石の加工に用いられた石器は、建造物の周囲と両側の部屋に分布しているが、中央の部屋からは出土しなかった。出土遺物の分布から、書記が中央の部屋を主に訪問者の接待や政治活動に利用したと推定されている [Inomata et al. 2002: 316]。この仮説は、使用痕分析の結果によって強化される。

南の部屋では王が使った黄鉄鉱製モザイク鏡の部品、及び王権のシンボルであったアラバスター製ジェスター神の頭飾りが出土した。後者は、アグアテカ遺跡の石碑 7 号と石碑 19 号に彫刻された「支配者 5」タン・テ・キニッチ Tan Te'K'inich 王が装着しているジェスター神の頭飾りと酷似している。770 年に即位したこのアグアテカ最後の王が、発掘された頭飾りを装着した蓋然性が高い

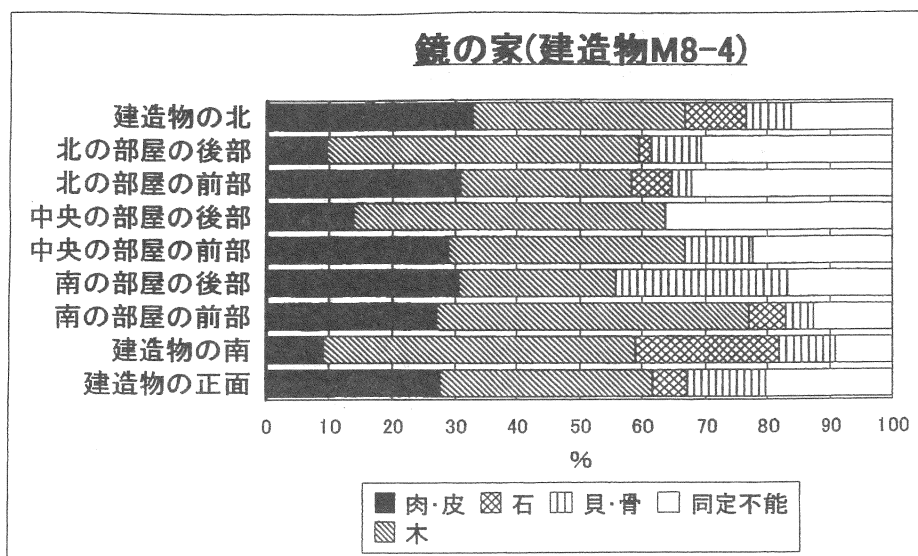


図 14 アグアテカ遺跡の「鏡の家」(建造物M8-4) 出土石器の被加工物

[Inomata et al. 2002: 315]。南の部屋の外側から出土した石器では石の加工の比率(22.7%)が高く、こうした石製装飾品の加工に用いられたと考えられる(図14)。

さらに南の部屋のジェスター神の頭飾りが出土した同じベンチの上で、長さ約2cmに加工された骨製品が10点見つかった。これらもまた王の頭飾りの一部を構成した可能性が高い[Inomata et al. 2002: 315]。使用痕分析によれば、南の部屋の後部から見つかった石器には、こうした王の装束を飾った貝・骨製装飾品の証拠が最も多く同定された(27.1%)。高い地位の宮廷人兼書記は同時に王に仕えた支配層工人であった蓋然性が高く、こうした王権の宝器や様々な奢侈品を従属生産したと考えられる。この男性は、工芸品の生産の他に、行政・宗教的な業務なども行っていた可能性が高い。

女性の活動に注目すると、北の部屋から出土した石器は、調理だけでなく、木製品、貝・骨製品の製作や石の加工に用いられた(図14)。書記の妻が、こうした手工業生産の一部を担っていたと考えられる。

#### 6-4. 王宮(建造物M7-22)

アグアテカ遺跡最大の住居跡である王宮(建造物M7-22)は、同じく宮殿グループに位置する建造物M7-32と共に持ち送り式の天井を有した。王宮は、東端の部屋、東の部屋、中央の部屋、西の部屋、西端の部屋の5つの主要な部屋の他に、正面の部屋を有した。中央の部屋は最も広く、王が用いたと考えられる。発掘調査の結果、他の焼失建造物跡とは放棄パターンが異なることが明らかになった。完形または修復可能な土器のような一次堆積遺物の床面直上の出土量が極めて少なかった。中央の部屋、東の部屋、西の部屋及び西端の部屋には、ほとんど遺物が残されていなかった。さらに建造物M7-32では、床面直上の一次堆積遺物の出土量がさらに極端に少なかった。王家の人々が敵襲を前にして既に大部分の所持品を持ち運んで避難しており、その後に敵が宮殿グループの

terminal ritual 破壊儀礼を行ったと推定される[Inomata et al. 1998; Ponciano and Pinto 2000]。

唯一外から密閉されていた王宮の東端の部屋には、王家の所持品の一部が貯蔵されていた。同部屋からは、薄型の土器仮面、土器の壺、小型の土器製太鼓、骨製品、貝製装飾品、石器などが大量に見つかった。一方、正面の部屋とその前及び王宮の西側では、大量の土器片、石器、メタテの破片、翡翠製数珠、貝製装飾品の破片、黄鉄鉱の破片などが出土した。大部分の遺物は小さな破片であり、焼けているものもあった。敵が王宮を破壊し、火を放ったと考えられる[Inomata 2000]。

王宮から出土した石器のデータは、敵が王宮の破壊儀礼を行ったという猪俣他[Inomata et al. 1998]の仮説を支持する。高倍率の金属顕微鏡による石器の詳細な分析の結果、王宮出土の石器には、他の建造物跡出土の石器よりも火災による石器の表面変化が確認された。388 点の王宮出土の分析石器中の 98 点 (25.3%) に、火と熱によって何らかの表面変化が観察された。そのうち 30 点 (7.7%) の石器が、使用痕観察が不可能なほど全表面が焼けていた (表 3)。

宮殿グループの空間利用の解釈は、一次堆積遺物の出土量が少ない上に敵が破壊儀礼を行ったと考えられるために容易ではない。しかしながら注目すべきことに石器の使用痕分析によると、王宮出土の石器には、貝・骨製装飾品製作の証拠は全く認められなかった (図 11)。上述のように王宮からは骨製品や貝製装飾品の完成品が多く出土しているのに対して、その他の支配層住居跡のように貝・骨製装飾品の未製品や破片が見つからなかった。さらに、宮殿グループの建造物M7-32 出土の石器にも貝・骨製装飾品の製作を示唆する使用痕は観察されなかった。こうした貝・骨製装飾品製作の証拠の欠如は、宮殿グループの放棄パターンが異なるためかもしれない。しかし、王家の人々はこうした装飾品の製作に従事せず、上述の「鏡の家」のような他の支配層世帯から完成品を受け取っていた蓋然性が高いと筆者は考える。この解釈が正しいとすれば、こうした王のために従属生産した半専門の支配層工人の存在は、古典期マヤ支配層内の社会経済的階層性的一面を示唆する。

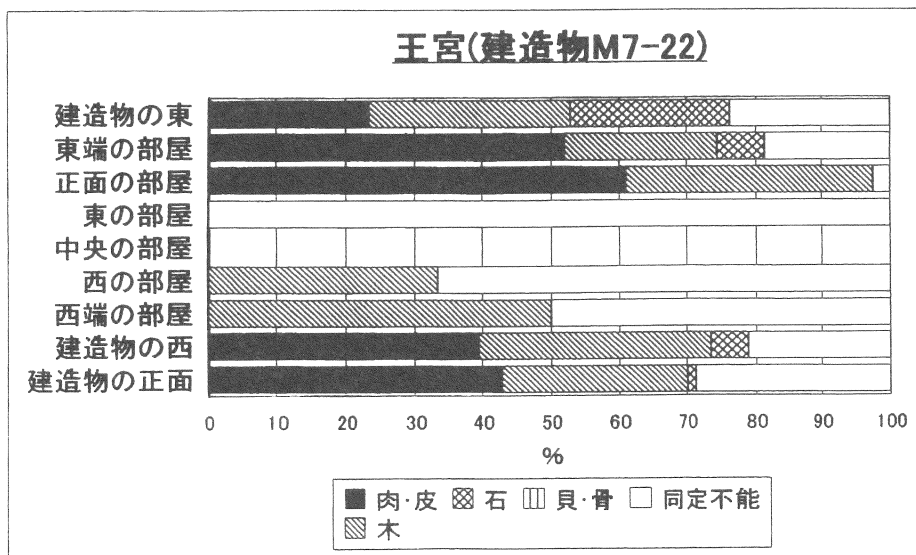


図 15 アグアテカ遺跡の王宮 (建造物M7-22) 出土石器の被加工物

王家の人々の活動を復元する上で重要なのが、唯一外から密閉されて王家の所持品の一部が貯蔵されていた東端の部屋及び敵襲によってこの部屋の外の東側に散らばった遺物である。王家の人々は石器をはじめとするこれらの所持品を再利用するつもりであったのであろう。図 15 は、王宮の様々な場所から出土した石器の被加工物の比率を示している。東端の部屋及びその東側出土の石器には、肉・皮の加工、木・その他の植物の加工が確認された。王家の人々は、木製品や皮製品といった手工業生産にも従事していたと考えられる。

石の加工が、東端の部屋 (6.7%) 及びその東側 (23.5%) から出土した石器にそれぞれ高い比率で検出された (図 15)。王宮からは「石のみの家」に次いで、「鏡の家」と共に全部で 7 点の硬質緑色石製磨製石のみが出土している (図 12)。使用痕分析によれば、全て石の加工に使用された。換言すれば、支配者 5 を含んだ王家の人々も何らかの形で石碑の彫刻にかかわっていたと考えられる。王が石碑の彫刻の執行を監督していた可能性が高い。もしそうであったならば、アグアテカの「支配者 5」タン・テ・キニッチは、王、書記、戦士であっただけでなく石碑彫刻の執行監督という複数の社会的役割を担っていたのである。

## 7. 結論

第一に発掘された全ての支配層住居跡から奢侈品及び実用品の生産の証拠が見つかり、古典期マヤ支配層の間で手工業生産が広く行われていたことが明らかになった。王家の人々及び高い地位の宮廷人をはじめとするアグアテカの支配層は、半専門の手工業工人であったのである。換言すれば、自らが支配層に属した手工業工人が世帯内の消費のためだけでなく、王をはじめとする世帯外の他の支配層のために奢侈品と実用品の両方を従属生産した。猪俣と Triadan [Inomata and Triadan 2000] が強調しているように、手工業生産が支配層住居の内外で行われていたことは特筆に価する。

こうしたデータは、古典期後期末のアグアテカのマヤ支配層における手工業生産とその他の日常生活の活動の類似性と多様性を示唆する。支配層世帯では、木製品や皮製品の半専門の生産が行われ、調理その他の活動が行われた。書記の妻も手工業生産に従事した。一方で「石のみの家」の住人は石碑の彫刻を、「鏡の家」の住人は貝・骨製装飾品のような奢侈品や王権の宝器の製作を重点的に行った。猪俣 [Inomata 2001b] が述べているように、熟練した支配層工人が生産した奢侈品は極めて価値が高く、工芸品の製作活動自体が被支配層との地位の差異を増大させ、支配層間の競争的な交流において重要な役割を果たしたと考えられる。

第二に都市機能という面から見ると、アグアテカは実用品と奢侈品からなる半専門の手工業製品の生産と消費の中心地であったといえる。Sanders と Webster [1988] は、全ての古典期マヤ都市を王政儀礼都市 (regal-ritual city) と見なし、その特徴として儀式的機能が極端に突出していたことや都市周囲の小集落で生産された手工業実用品を主に消費する場所であったことなどを示唆する。その典型例として古典期マヤ文明の主要都市の一つであったコパン遺跡を挙げ、①奢侈品を支配層のために半専門生産し都市中心部に居住した工人、②実用品を都市周囲の小集落で半専門生産した農民手工業者という、2 種類の専門手工業生産があったとする。しかし、彼らが指揮したコパン考古学プロジェクト第 2 期の発掘調査には大きなサンプリング・バイアスがあった。コパン遺跡の中心グループをほとんど発掘せず、主に都市中心部の一部 (ラス・セブルトウラス地区) やコパン谷の一

部の小集落の集中発掘調査に基づき結論を導いたのである。

筆者の石器分析によれば、コパンでは中心グループや都市中心部のエル・ボスケ地区において黒曜石製石刃のような実用品、黒曜石製・チャート製両面調整尖頭器のような武器、さらに海の貝製装飾品のような奢侈品が半専業で生産された[青山 1997, 2002, Aoyama 1995, 1999]。コパンは、アグアテカと同様、消費の中心地であっただけでなく実用品と奢侈品の手工業生産の中心地でもあったのである。つまり二つの都市には、宮廷の宗教儀礼や政治活動だけでなく、経済活動もかなり集中していたと考えられる。

第三にアグアテカ遺跡出土の石器のデータを検討すると、古典期マヤ支配層では、従来示唆されていたよりも多くの割合の男性及び女性が手工業生産に従事していた可能性が高い。エルサルバドルのホヤ・デ・セレン遺跡は、火山の噴火によって西暦 600 年頃に農民の住居が埋没し、「中米のポンペイ」と呼ばれている[Sheets 2002]。この遺跡は、グアテマラ高地の黒曜石原産地への距離がアグアテカよりもはるかに近い。しかし Payson Sheets によれば、ホヤ・デ・セレンの農民世帯は平均して 6 点の定型的な石刃を含む計 13 点ほどの黒曜石製石器しか所持しておらず、これらを完成品として手に入れていた(図 16)。一方アグアテカの支配層世帯は、200 点から 400 点の石刃を含む黒曜石製石器を使っていたのである。この両者の差異は、アグアテカ支配層の地位の高さを示すだけではない。支配層が黒曜石の遠距離交換や手工業生産に強く関わっていたことを示唆する。さらにティカル[Moholy-Nagy 1997]やコパン[Aoyama 2001c]のように徐々に放棄された古典期マヤ都市では、手工業生産の重要性が過小評価されてきたと考えられる。

最後にアグアテカ遺跡出土の石器のデータは、古典期のマヤ支配層を構成した書記兼工芸家が、複数の社会的役割を担っていたとする猪俣[Inomata 2001b]の仮説を強化する。一部の書記兼工芸家は戦士でもあった可能性が高い。同一人物が書記であったと同時に、石器、木製品、貝製品、骨製品といった手工業品を生産し、あるいは石碑の彫刻に従事し、戦争、行政・宗教的な業務といった、

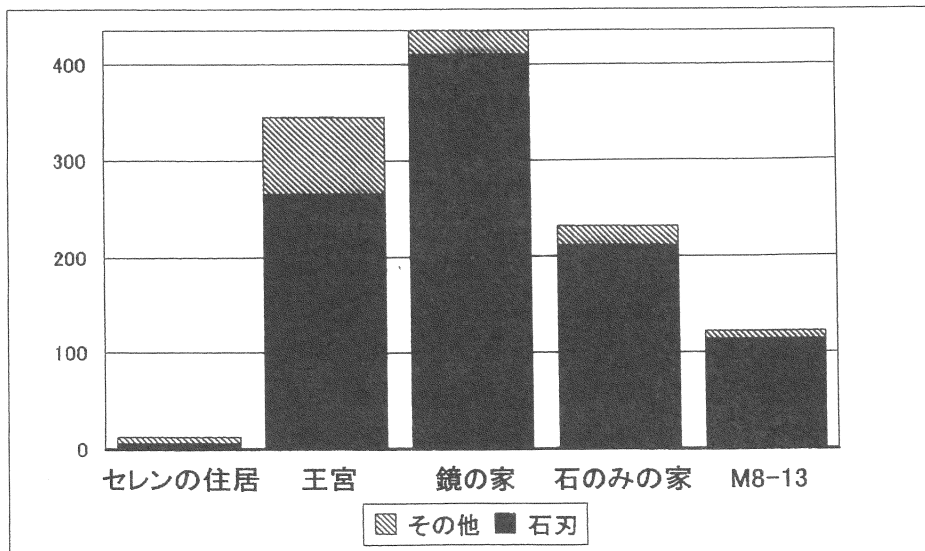


図 16 ホヤ・デ・セレン遺跡とアグアテカ遺跡の住居跡の黒曜石製石器出土数

多種多様な活動に住居の内外で従事したと考えられる。つまり、古典期マヤ社会では、他の世界の多くの先産業社会と同様に専業工人は存在せず、職業の専門化が比較的未発達な社会であったのである。

#### 【謝辞】

1998年から2002年までのグアテマラにおける筆者の調査は、グアテマラ国立人類学歴史学研究所の許可と協力のもと、米国の Foundation for the Advancement of Mesoamerican Studies (FAMSI、1998年)、文部科学省科学研究費補助金(平成11~14年度)、三菱財団(平成11年度)、高梨財団(平成11年度)他の研究助成によって行われた。現地では猪俣健氏、Daniela Triadan氏、Eric Ponciano氏、Estela Pinto氏をはじめとするアグアテカ考古学プロジェクトのメンバーから様々な有益な御教示や協力をいただいた。またアグアテカ遺跡出土石器のデータのコンピュータ入力を手伝った妻ビルマに深く感謝します。

#### 引用文献

Adams, Richard

- 1970 Suggested Classic Period Occupational Specialization in the Southern Maya Lowlands. In *Maya Archaeology*, edited by W. Bullard, pp. 487-498. Peabody Museum, Harvard University, Papers No. 61, Cambridge.

Aldenderfer, Mark

- 1991 Functional Evidence for Lapidary and Carpentry Craft Specialties in the Late Classic of the Central Peten Lakes Region. *Ancient Mesoamerican* 2:205-214.

Aldenderfer, Mark, Larry Kimball, and April Sievert

- 1989 Microwear Analysis in the Maya Lowlands: The Use of Functional Data in a Complex-Society Setting. *Journal of Field Archaeology* 16:47-60.

Aoyama, Kazuo (青山和夫)

- 1989 Estudio Experimental de las Huellas de Uso sobre Material Lítico de Obsidiana y Sílex. *Mesoamérica* 17:185-214.
- 1993 「東南マヤ低地のクロスロードにおける打製石器の生産・流通システム」『考古学研究』40(3):103-121.
- 1994 Socioeconomic Implications of Chipped Stone from the La Entrada Region, Western Honduras. *Journal of Field Archaeology* 21:133-145.
- 1995 Microwear Analysis in the Southeast Maya Lowlands: Two Case Studies at Copán, Honduras. *Latin American Antiquity* 6:129-144.
- 1997 「古典期マヤの儀礼、奢侈品生産、饗宴—ホンジュラス、コパン遺跡出土石器の使用痕の総合的解釈—」『古代文化』49(1):19-33.
- 1998 「交換、複合社会、古代マヤ都市—先コロンブス期マヤ低地における打製石器の通時的的研究—」『古代アメリカ』創刊号:3-40.

- 1999 *Ancient Maya State, Urbanism, Exchange, and Craft Specialization: Chipped Stone Evidence of the Copán Valley and the La Entrada Region, Honduras*. University of Pittsburgh Memoirs in Latin American Archaeology No. 12, Pittsburgh.
- 2000 La Especialización Artesanal y las Actividades Cotidianas en la Sociedad Clásica Maya: El Análisis Preliminar de las Microhuellas de Uso sobre la Lítica de Aguateca. In *XIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, edited by Juan Pedro Laporte, Héctor L. Escobedo, Ana Claudia de Suasnavar and Bárbara Arroyo, pp. 215-231, Ministerio de Cultura y Turismo, Instituto de Antropología e Historia, Asociación Tikal, Guatemala.
- 2001a La Subsistencia del Formativo en Albeño y Especialización Artesanal Clásica Maya en Aguateca: La Evidencia de las Microhuellas de Uso sobre la Lítica. In *XIV Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, edited by Juan Pedro Laporte, Ana Claudia de Suasnavar and Bárbara Arroyo, pp.853-867. Ministerio de Cultura y Deportes, Instituto de Antropología e Historia, Asociación Tikal, Guatemala.
- 2001b Ritos de Plebeyos Mayas en la Cueva Gordon no. 3 de Copán (Honduras) durante el Período Clásico: Análisis de las Microhuellas de Uso sobre la Lítica Menor de Obsidiana. *Mayab* 14:5-16. Sociedad Española de Estudios Mayas, Madrid.
- 2001c Classic Maya State, Urbanism, and Exchange: Chipped Stone Evidence of the Copán Valley and Its Hinterland. *American Anthropologist* 103:346-360.
- 2002 「専門手工業生産と古代マヤ文明の都市性—ホンジュラス西部コパン遺跡の打製石器生産を通じて—」『考古学研究』49(3) : 85-105.
- 青山和夫・猪俣健  
1997 『メソアメリカの考古学』同成社,東京.
- Becker, Marshall  
1973 Archaeological Evidence for Occupational Specialization among the Classic Maya at Tikal, Guatemala. *American Antiquity* 38:396-406.
- Braswell, Geoffrey E., John E. Clark, Kazuo Aoyama, Heather I. McKillop, and Michael D. Glascock  
2000 Determining the Geological Provenance of Obsidian Artifacts from the Maya Region: A Test of the Efficacy of Visual Sourcing. *Latin American Antiquity* 11:269-282.
- Clark, John E.  
1987 Politics, Prismatic Blades, and Mesoamerican Civilization. In *The Organization of Core Technology*, edited by Jay K. Johnson and Carol A. Morrow, pp. 259-284. Westview Press, Boulder.
- Coe, Michael D.  
1977 Supernatural Patrons of Maya Scribes and Artists. In *Social Process in Maya Prehistory: Essays in Honor of Sir Eric Thompson*, edited by Norman Hammond, pp. 327-349. Academic Press, London.
- Coe, Michael D., and Justin Kerr  
1997 *The Art of the Maya Scribe*. Harry N. Abrams, New York.
- Costin, Cathy  
2001 Craft Production Systems. In *Archaeology at the Millennium: A Source Book*, edited by G. Feinman



and D. Price, pp. 273-327. Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York.

Emery, Kitty F.

- 2000 Análisis de Restos de Fauna de Operaciones 14, 20 y 23. In *Informe del Proyecto Arqueológico Aguateca: La Temporada de Campo 1999*, edited by Erick Ponciano, Takeshi Inomata and Daniela Triadan, pp. 105-123. Instituto de Antropología e Historia de Guatemala, Guatemala.

Fash, William.

- 2001 *Scribes, Warriors and Kings: The City of Copán and the Ancient Maya*. Revised Edition. Thames and Hudson, London.

Haviland, William

- 1974 Occupational Specialization at Tikal, Guatemala: Stoneworking-Monument Carving. *American Antiquity* 39:494-496.

Houston, Stephen

- 2000 Into the Minds of Ancients: Advances in Maya Glyph Studies. *Journal of World Prehistory* 14:121-201.

Inomata, Takeshi (猪俣健)

- 1997 The Last Day of a Fortified Classic Maya Center: Archaeological Investigations at Aguateca, Guatemala. *Ancient Mesoamerica* 8:337-351.
- 2000 Excavaciones en la Estructura M7-22: Operación 22A. In *Informe del Proyecto Arqueológico Aguateca: La Temporada de Campo 1999*, edited by Erick Ponciano, Takeshi Inomata and Daniela Triadan, pp. 24-31. Instituto de Antropología e Historia de Guatemala, Guatemala.
- 2001a King's People: Classic Maya Courtiers in a Comparative Perspective. In *Royal Courts of the Ancient Maya, Vol. 1: Theory, Comparison, and Synthesis*, edited by Takeshi Inomata and Stephen Houston, pp. 27-53. Westview Press, Boulder.
- 2001b The Power and Ideology of Artistic Creation: Elite Craft Specialists in Classic Maya Society. *Current Anthropology* 42:321-349.

Inomata, Takeshi, and Laura R. Stiver

- 1998 Floor Assemblages from Burned Structures at Aguateca, Guatemala: A Study of Classic Maya Households. *Journal of Field Archaeology* 25:431-452.

Inomata, Takeshi, and Daniela Triadan

- 2000 Craft Production by Classic Maya Elites in Domestic Settings: Data from Rapidly Abandoned Structures at Aguateca, Guatemala. *Mayab* 13:57-66. Sociedad Española de Estudios Mayas, Madrid.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Erick Ponciano, Richard E. Terry, Harriet F. Beaubien, Estela Pinto, and Shannon Coyston

- 1998 Residencias de la Familia Real y de la Elite en Aguateca, Guatemala. *Mayab* 11:23-39. Sociedad Española de Estudios Mayas, Madrid.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Erick Ponciano, Estela Pinto, Richard E. Terry, and Markus Eberl

- 2002 Domestic and Political Lives of Classic Maya Elites: The Excavations of Rapidly Abandoned

Structures at Aguateca, Guatemala. *Latin American Antiquity* 13:305-330.

梶原洋・阿子島香

- 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み—」『考古学雑誌』67(1):1-36.

Keeley, Lawrence H.

- 1980 *Experimental Determination of Stone Tool Uses: A Microwear Analysis*. University of Chicago Press, Chicago.

Kent, Susan (editor)

- 1984 *Method and Theory for Activity Area Research: An Ethnoarchaeological Approach*. Cambridge University Press, Cambridge.

Lewenstein, Suzanne M.

- 1987 *Stone Tool Use at Cerros*. University of Texas Press, Austin.  
1991 Woodworking Tools at Cerros. In *Maya Stone Tools*, edited by Thomas R. Hester and Harry Shafer, pp. 239-249. Prehistory Press, Madison, WI.

Levi-Sala, Irene

- 1986 Use Wear and Post-Depositional Surface Modification: A Word of Caution. *Journal of Archaeological Science* 13:229-244.

Miller, Mary, and Karl Taube

- 1993 *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames and Hudson, London. (『図説マヤ・アステカ神話宗教事典』増田義郎監修：東洋書林)

Moholy-Nagy, Hattula

- 1997 Middens, Construction Fill, and Offerings: Evidence for the Organization of Classic Period Craft Production at Tikal, Guatemala. *Journal of Field Archaeology* 24:293-313.

Netting, Robert, Richard Wilk, and Eric Arnould (editors)

- 1984 *Households: Comparative and Historical Studies of the Domestic Group*. University of California Press, Berkeley.

Ponciano Alvarado, Erick, and Estela Pinto Gonzáles

- 2000 Excavaciones en Estructura M7-32: Operación 22B. In *Informe del Proyecto Arqueológico Aguateca: La Temporada de Campo 1999*, edited by Erick Ponciano, Takeshi Inomata and Daniela Triadan, pp. 32-53. Instituto de Antropología e Historia de Guatemala, Guatemala.

Reents-Budet, Dorie

- 1994 *Painting the Maya Universe: Royal Ceramics of the Classic Period*. Duke University Press, Durham.

Sabloff, Jeremy

- 1994[1998] *The New Archaeology and the Ancient Maya*. W. H. Freeman, New York. (『新しい考古学と古代マヤ文明』青山和夫訳：新評論)

Sanders, William, and David Webster

- 1988 The Mesoamerican Urban Tradition. *American Anthropologist* 90:521-546.

Santley, Robert, and Kenneth Hirth (editors)

- 1993 *Prehispanic Domestic Units in Western Mesoamerica: Studies of the Households, Compound, and Residence*. CRC Press, Boca Raton.

Sheets, Payson D.

- 1983 Chipped Stone from the Zapotitan Valley. In *Archaeology and Volcanism in Central America: The Zapotitan Valley of El Salvador*, edited by Payson Sheets, pp. 195-223. University of Texas Press, Austin.
- 2002 *Before the Volcano Erupted: The Ancient Ceren Village in Central America*. University of Texas Press, Austin.

Sievert, April K.

- 1992 *Maya Ceremonial Specialization: Lithic Tools from the Sacred Cenote at Chichén Itzá, Yucatán*. Prehistory Press, Madison, WI.

Spence, Michael

- 1984 Craft Production and Polity in Early Teotihuacan. In *Trade and Exchange in Early Mesoamerica*, edited by Kenneth Hirth, pp. 87-114. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Stuart, David

- 1993 Historical Inscriptions and the Maya Collapse. In *Lowland Maya Civilization in the Eighth Century A.D.*, edited by Jeremy A. Sabloff and John S. Henderson, pp. 321-354. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Thompson, Eric

- 1954 *The Rise and Fall of Maya Civilization*. University of Oklahoma Press, Norman.

Vaughan, Patrick

- 1985 *Use-Wear Analysis of Flaked Stone Tools*. University of Arizona Press, Tucson.

Wilk, Richard, and Wendy Ashmore (editors)

- 1988 *Household and Community in the Mesoamerican Past*. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Wilk, Richard, and William Rathje

- 1982 Household Archaeology. *American Behavioral Scientist* 25(6):617-639.

山田しょう

- 1987 「使用痕光沢の形成過程—東北大学使用痕研究チームによる研究報告その6」『考古学と自然科学』19:101-123.

## Classic Maya Elite Craft Production and Domestic Activities: Lithic Evidence from Aguateca, Guatemala

Kazuo Aoyama  
(Ibaraki University)

Key words: craft production, domestic activities, urbanism, Classic Maya, Aguateca

In studies of urbanism and early states, craft specialization is frequently interpreted as indicating socioeconomic complexity, stratification, or political legitimation (e.g., Brumfiel and Earle 1987; Clark and Parry 1990; Evans 1978; Peregrine 1991; Wailes 1996). Opinions vary markedly concerning the nature of Classic Maya urbanism, the degree of craft specialization present in Classic Maya cities, and the extent of state control of craft production. In this context, a particularly important issue is the nature of elite specialization. Based on iconographic and ethnohistoric data, several scholars have suggested that Classic Maya scribes probably carried out craft production and/or artistic work (Coe 1977; Reents-Budet 1994). However, the reconstruction of craft specialization in the Classic Maya lowlands is often difficult because direct archeological evidence for craft specialization in the form of workshops or primary production areas is scarce. Moreover, the detailed analysis of stone-tool use in Maya archaeology is still in its infancy.

This paper will address the issues of the articulation of elite craft and administrative work related to domestic activities as well as the nature of political control over craft production through the analysis of new lithic data from artifact-rich buildings at a rapidly abandoned city of Aguateca, Guatemala. Aguateca was a small fortified Classic Maya city located in the Petexbatún region of Guatemala, and was burned during an attack by enemies at the end of Late Classic period (Inomata 1997). The Aguateca Archaeological Project directed by Takeshi Inomata and his colleagues revealed the richest floor assemblages ever found at a lowland Classic Maya city. From 1998 and 2002, I classified all 10,788 lithic artifacts recovered from Aguateca first by raw material and next, according to technological types. I put a particular emphasis on microwear analysis based on the high-power microscopy approach to examine the nature of elite craft production in Classic Maya society.

The ancient inhabitants of Aguateca imported nearly all the obsidian from El Chayal mainly as polyhedral cores. Some elite household members appear to have manufactured prismatic blades in or near their residences. The obsidian data from Aguateca are consonant with the interpretation of Mesoamerican obsidian core-blade technology as under elite control (e.g., Aoyama 2001; Clark 1987). In the case of chert artifacts, the production of expedient flake tools

was dominant in each household. The production of chert oval bifaces and bifacial points took place intensively at Aguateca. It is safe to say that at least some nobles, including scribes/artists at Aguateca were stone knappers on a part-time basis.

This study suggests that a significant portion of Maya elites produced not only luxury goods and weaponry, but also utilitarian items for intrahousehold and extrahousehold consumption at the epicenter of Aguateca. Artistic creation probably had important implications for the distinction of elites from the rest of society and for competitive interactions among elites. A resident of Str. M8-8 carved stelae for the ruler. Moreover, a resident of Str. M8-4 engaged in production of shell and bone objects of high symbolic values as royal regalia on a part-time basis. The royal family did not manufacture any shell or bone objects themselves but received some finished artifacts from other domestic groups such as Str. M8-4. In spite of a relatively low output of production, this implies a socioeconomic difference related to craft specialization, i.e., elite attached specialists working for the ruler.

Based on the lithic data from Aguateca, I suspect that there was an even larger portion of Classic Maya elites, both men and women, engaged in craft production than previously believed. The role of low-volume craft production in the sociopolitical development at more gradually abandoned Classic Maya centers may have been greatly underestimated. Although craft production was practiced at Aguateca, it did not approach the level of full-time production proposed by Childe (1958). The lithic data of Aguateca strongly support Inomata's (2001) assertion that elite scribes/artists possessed multiple social identities and roles. Some elite scribes/artists and rulers were also warriors. At the same time, an individual may have conducted various activities, such as stone knapping, carving wood, shell, bone or stone, as well as administrative, diplomatic, and ritual duties in domestic settings. This, in turn, implies a relatively poorly developed division of labor in Classic Maya society.

原稿受領日：2002年11月23日

採択決定日：2003年02月10日